

小林多喜二伝——多喜二，庁商へ——

小学校時代から，庁商時代の前半

倉 田 稔

目 次

第1部 小樽移住から高商卒業まで

はじめに

第1章 少年時代（つづき）

12 啄木の小樽論

13 小樽，寸描

14 社会運動の人びと

15 姉弟たちと，先生と

16 港工事，運河，情勢

17 大正デモクラシー

——多喜二の生涯を，大きな観点から把握する一方法

補遺と訂正

付録

第2章 庁商時代

1 庁商入学

2 伯父の家で

3 通学

4 親孝行

5 庁商時代

6 革命と騒動

- 7 『貧乏物語』
- 8 黒沼校長
- 9 授業科目など
- 10 文学の出発
- 11 入院
- 12 石本少年と
- 13 絵
- 14 絵の禁止

はじめに

小林多喜二（1903-1933）が小学校を卒業するまでは、前号（『人文研究』第86輯 1983年3月）で書いたが、ここでは、第1章の少しの続きと、その後の、北海道庁立小樽商業学校の時代を述べる。ただし、その前半である。従って、多喜二伝の2、ということになる。本稿では、第1部は、「小樽移住から高商卒業まで」、第1章は、「小樽移住から小学校卒業まで」、第2章は、「庁商時代」を意味する。

第1章 少年時代（つづき）

12 啄木の小樽論

石川啄木は既述のように、小林多喜二一家が小樽に移住した時に、小樽にいたのだが、その彼の小樽論を、啄木の日記から見よう。明治40年、小樽にやってきた啄木は、9月14日の日誌で書く。

小樽から「再び車中の人となりて北進せり、銭函にいたる間の海岸いと興多し」。これは現在でも言えることである。9月27日に、逆に札幌からの汽

車で帰る時⁽¹⁾、彼はこう書く。「銭函をすぎて千丈の崖下を走る」。

10月1日。「遠く聞ゆる夜回りの金棒の響は函館のそれよりも忙しげ也。小樽は忙しき市なり。札幌を都といへる予は小樽を呼ぶに『市』を以てするの尤も妥当なるを覚ふ。⁽²⁾」

10月3日。「小樽の如き悪道路は、蓋し天下の珍なり。⁽³⁾」当時は道路が舗装されていなかった。そして小樽の悪路は有名だった。

彼は、「小樽のかたみ」というスクラップを作っていた。そこにはこうある。

当時小樽は、人口10万で、その膨張が急速であった。商港としては、函館を凌駕して〔北海道で〕第1位に上がった。日露の協約が成立してからは、ウラジオストックとの貿易で、覇を敦賀と争っている。新聞も上田重吉⁽⁴⁾の小樽新聞は三千幾百号となり、約一万部を越えている⁽⁵⁾。小樽にきて初めて真に新開地的な、真に植民地精神の溢れる男らしい活動を見た。小樽の人は歩くのでない、突貫するのである。小樽人の特色は、執着心のないことである。

(1) 明治13年(1880年)11月28日に、手宮—札幌間鉄道が開通した。クロフォードの指揮による。これは日本で3番目にできた鉄道だった。だが2時間掛かった。

明治22年(1889年)まで開拓使が直接経営をした。その後、北炭に払い下げる。

(2) 『石川啄木全集』第5巻 筑摩書房 1983年

(3) 170ページ

(4) 重吉とあるが、重良であろう。

(5) 小樽の新聞は、金子元三郎が『北門新報』を明治24年(1891年)4月に作った。これは明治25年(1892年)5月に札幌に移転した。その後、『北辰日報』『新北門』が出るが、廃刊となる。明治27年(1894年)『小樽新聞』が上田重良によって作られた。上田重良は、東京専門学校出である。

明治26年5月に札幌で『北海民燈』が出たが、それを上田が買い、『小樽新聞』としたものである。なお、明治27年に『小樽商業新報』が出た。明治35年(1902年)から36年には、小樽では続々新聞が出た。『小樽日報』——つまり啄木が勤めた新聞である——、『小樽公論』『北海朝報』『北政日報』『北海道新聞』『北民』『小樽毎日新聞』である。しかしこれらは倒れた。例えば、『小樽日報』は半年でダウンした。一方、『北海道毎日新聞』『北門新報』『北海時事』が合同して、札幌に『北海タイムス』が作られた。これと、『函館毎日新聞』、『小樽新聞』が道三大新聞となった。

民政党系の『小樽新聞』に対抗して、政友会系の『北門日報』が小樽で作られたこともある。

啄木は、既述の、「歌うことなき人人の声の荒さ」を詠っているが、本人は悪意をもって書いてはいない。それにまた、道路は日本一の悪路である、と書く。小樽は「男らしい活動の都府」であり、「此活動の都府の道路は人も云ふ如く日本一の悪道路である。善悪に拘らず日本一と名のつくのが、既に男らしいではないか。且つ他日此悪道路が改善せられて市街が整頓すると共に、他の不必要な整頓——階級とか習慣とか云ふ死法則まで整頓するのかと思へば、予は一年に十足二十足の下駄を余計に買わねばならぬとしても、願わくば未来永劫小樽の悪路が日本一であって貰いたい。⁽⁶⁾」

13 小樽，寸描

小樽は、明治20年代に、商港としての地位を確立してきた。

明治24年に小樽と高島が合併した。日清戦争以後、政府は北海道拓殖に力を入れた。明治32年10月、自治体小樽が誕生した。つまり行政地区として、小樽区ができたのである。区長は、初め金子元三郎で、明治35年まで勤め、第2代区長は山田吉兵衛、第3代区長は椿である⁽⁷⁾。施行の時、色内村、稲穂村、手宮村、麩村を合わせて小樽区とした。

小樽は初め、現在の南小樽が中心地であった。明治初年以來、勝納川を中心に発展してきた。現在の小樽市心に妙見川（みょうけんがわ）が流れているが、明治32年小樽区制施行以前は、そこを境にして小樽と高島が別れていた。妙見川の上流をオコバチ川と言う。

明治14年5月21日夜、金曇町（こんたん町、今の若松町）で出火し、旧小樽はほとんど全滅し、その後、中心が今の花園、稲穂、色内へ移った。その後、2つの火災が起きて、第1火防線＝浅草通り、第2火防線＝停車場通り、第3火防線＝竜宮通りが作られた。

旧小樽市内は、急激に無秩序に膨張し、山坂が多かったので、道幅がせま

(6) 『啄木全集』第8巻、355、360、361ページ

(7) 倉内孝治編『小町谷純先生の小樽の思い出』

く屈曲が多く、また葺葺・板壁の家が大多数であった。春先から夏至にかけて西北西か西南西の季節風は、10 m 以上の風速で吹き荒れることが多く、全国都市中最も出火率の高い都市とされていた。

明治 37 年 5 月 8 日夜、折からの西南烈風にあおられて、稲穂町畑 14 番地（現産業会館付近）の失火が、稲穂町一带と色内から石山を越えて手宮の 1 部にいたる 2,500 戸を焼いた。小樽最大の火事である（松田惇二）。多喜二の伯父の履災した火事である。

小樽は、オタルナイ（砂と川）というアイヌ語から来た。稲穂（イナウ）、色内（イルオナイ）、手宮（テンムンヤ）、高島（タカシュマ）などの名も、アイヌ語から来た。北海道は、初め本州の植民地であって、その後、半ば植民地となった。同時に、北海道の拓殖の歴史はアイヌ人への侵略の歴史でもあった。多喜二はこのアイヌ問題をあまり論じていない。それは小樽人であったことにも関係する。小樽は北海道では相対的にアイヌ人が少なかったからである。

14 社会運動の人々

幸徳秋水と大逆事件に関係した小樽の人には、次の人がいる。

毛馬内官次（1870-）、無政府主義者。私行を理由に小樽堺小学校長の職を追われた。爆弾製造の疑いが掛かったのである。

斎藤伊蔵は、幸徳の友人大石誠之助⁽⁸⁾との交際を察知され、当局の追求をうけた。

島崎卯七は、1910 年夏より、大石誠之助との交際を察知され、尾行を受けた。ペンネームは、江鷗力？ だった。

田口国司も、大石誠之助との交際を察知され、尾行をうけた。のち札幌に移住した。

(8) 大石誠之助(1867-1911)。和歌山県新宮町生まれ。明治 23 年アメリカへ行き、苦学して、医学ドクトルになる。帰国して故郷で開業する。幸徳、堺らと交わり、社会主義者として活動する。大逆事件に連座し、死刑となる。

塚原辰吉は、小樽時代の啄木に師事した。大逆事件後、当局の尾行をうけた。彼は啄木の1周年忌集会を主宰した。歌人で、ペンネームは花骸である。

新田 融(1880-1937)は、長野県明科製材工場職工時代に、大逆事件に巻き込まれた⁽⁷⁾。

篠原三郎(1891-1941)は、札幌出身、歌人。爆弾製造の疑いが掛かった。当局の尾行をうけた。のち口語歌の普及につとめた。ペンネームは、静風、並木凡平(二代目)である。彼については、次稿で述べる。

なお1904年1月に、津田文輔が、小樽で労働者懇話会を計画し奔走した。

深尾範二(1885-1919)は、静岡出身だが、小樽の郵便局で電信係を勤めるかたわら社会主義宣伝をした。帰郷して、主義の宣伝にはげんだ。ペンネームは、ふは生、である。

宮村仁三郎(1875-1931)は、1906年10月に、日本社会党に入党した。

金久保兵作(1866-1936)は、晩年小樽で質屋を開業したが、茨城出身で、労働組合期成会員だった。北海道タコ部屋の実況報告を片山潜に送った。

1907年、多喜二が小学校に入った年の6月に、小樽の沖仲士・陸仲士の争議が起きた。そしてその労働条件改善のために、奔走した人がいた。大塩慶次郎である。小樽豊職人組織「親和会」の中心人物で、豊職人の賃上げ争議を指導したのだが、この争議に加わった。新谷辰次郎(1856-、石川出身)は、小樽沖仲士の相談役をつとめ、仲士の労働条件改善のため奔走した。晩年に市議になった。菅谷孫吉は、その小樽沖仲士の相談役をつとめた。藤田鉄之助と中山常次郎は、陸仲士の労働条件改善のために奔走した。

また1910年3月、三田岩吉は、小樽はしけ業中塚組大頭として、経営者の不正を追及した。

1911年6月16日、小樽の高島村で漁民ストラキが計画された。そして次の人が検挙された。まず、伊藤栄次郎(1887-)。そして、以下の人たちは20日に検挙された。高橋太一郎(1890-)。本間喜一(1887-)、本間金次(1891-)、

本間鶴吉（1891-）、本間虎松（1893-）である⁽⁹⁾。

15 姉弟たちと先生と

多喜二の兄・多喜郎（1895- 1907）が、小樽で1907年（明治40年）に学校に入ったが、すぐ亡くなったことは、すで（前号）に書いた。彼は秋田の小学校を出たが、多分、義務教育の尋常小学校を4年、高等小学校を2年、終わったのであろう。彼の入った小樽の学校は、私立の小樽商業（現在の北照高校の前身）か、小樽中学かのどちらかである。なぜなら庁立小樽商業は、大正2年（1913年）の創立であるから、その時には存在していないのである。それにたいして、小樽商業は明治25年（1897年）8月、小樽中学は明治35年（1902年）、の創立であるから、多喜郎は、この二つのうちのどちらかに入学したはずである⁽¹⁰⁾。したがって推定せざるをえないのだが、私は私立小樽商業であろうと思う。伯父は商人であり、商人の子は商業学校へと、多くの人が当時は考えていた。多喜二自身も小樽中学でなく、庁立ではあるが商業学校へ通わせられているからである。

多喜二は、潮見台小学校に1910年（明治43年）に入学するのだが、この学校は、初め分教場として開校し⁽¹¹⁾、明治34年（1901年）に潮見台尋常小学校として独立し、修業年限4年であった。明治40年（1907年）に2学年の高等小学校を併置し、潮見台尋常高等小学校となった。この時、姉チマが多喜二より3年先であるが、同じ小学校に通いはじめた。

小樽区内の区立小学校は、明治40年（1907年）に、10校で、尋常小学校が1、尋常小、高等小の併置が、9であった。学級数は尋常科が77、高等科が44、計121学級である。明治40年の1学期末に、児童数はこうだった。

(9) 堅田「北海道社会運動家名簿」1973年。

(10) 私は両校へ問い合わせた。だが、昔でもあるし、入学生は不明である、卒業生でないと分からない、昭和30年（1955年）以降ならばわかる、とのことだった。多喜郎は入学半年で病死したので、卒業していないのである。

(11) 前号 54ページを見よ

	男	女	計
尋常科	2,910	2,543	5,353
高等科	1,544	1,059	2,603
総計	4,454	3,602	7,956(人)

翌明治41年に、義務教育が6か年となり、2学年制の高等科が廃止され、潮見台尋常小学校となった⁽¹²⁾。6年制である。小樽では、稲穂、稲穂女子、量徳、量徳女子、花園の5校だけは、小学校の上に2年の高等科を作り、他の5校は単に尋常小学校とされた⁽¹³⁾。

明治41年の改革によって、いままで4年で卒業していた児童は、6年通うこととなり、2年の高等科の学年が義務となり、尋常5、5年生となった。こうして全国でも小学生が増大した。少なくとも、旧高等科に行かない人が行くようになったからである。小樽では旧高等科に行っていた人は比較的多かった。

多喜二が小学校に入るとき、小樽の公立の小学校には次のものがあった。年月は創立の時期である。

量徳小学校	明治10年(1877年)	6月
潮見台小学校	明治25年(1892年)	7月(分校としては明治15年8月)
稲穂小学校	明治28年(1895年)	1月
奥沢小学校	明治29年(1896年)	7月
量徳女子小学校	明治33年(1900年)	4月
稲穂女子小学校	明治34年(1901年)	4月
手宮小学校	明治34年(1901年)	4月
色内小学校	明治34年(1901年)	4月
堺小学校	明治35年(1902年)	1月

(12) 開校90周年記念誌『しおみだい』小樽市立潮見台小学校1991年5ページ

(13) 『小樽日報』明治四十年十月十五日、第一号。『啄木全集』第8巻による。

花園小学校 明治37年（1904年）4月
手宮西小学校 明治42年（1909年）4月⁽¹⁴⁾

なお市内には、3年制の簡易科小学校が、これら以前にあった。

多喜二が入学する1年前に、潮見台小学校は、児童数が903名で、男471名、女432名である。手塚の記す600名というのは、おそらく誤りであろう⁽¹⁵⁾。多喜二が入学した明治43年度には14学級であった。1クラス平均60名ていどとなり、随分生徒数が多い。多喜二の時代にこの小学校は、時々14学級、普通は12学級であった。当時、小学校は、男女別のクラスであった。だが6で割り切れない学級数の場合は、男女組があったかもしれない。以下、沿革誌を掲げる。西暦は私の挿入である。

「明治四十四（1911）年度

九月一四日 戊甲詔書下賜せらる。

一四学級

明治四十五（1912）年度

九月十三日 明治天皇御大葬に付 校庭に拝壇を設け 遥拝式を挙
行し、引き続き三日間休業し 謹んで哀悼の意を表し奉る。
十二学級（一学年より六学年に至る各二学級）

大正 二（1913）年度

九月二十一日 花園公園に於て区内小学校連合運動会を挙
行す。

大正 三（1914）年度 十二学級

大正 四（1915）年度 十二学級

大正 五（1916）年度 十月十一日 両陛下御眞影を戴す。⁽¹⁶⁾」

(14) 『小樽区史』昭和48年9月232-4ページ

(15) 前号 54ページ。

(16) 『小樽市立潮見台小学校沿革史』

この表では、連合運動会が大正2年度にしか記載されていないが、多喜二や三吾さんの時代に、毎年行われていた。連合運動会は、明治21年10月28日に初めて行われた。当日住吉神社の社有地に、量徳、手宮、開蒙⁽¹⁷⁾、同致⁽¹⁸⁾の4校の生徒1,200人が参加し、参観人も8,000人におよび、甚だ盛会であった。

その後、稲穂、高田、小樽簡易、色内、高島等の諸学校も加わり、開催日も5月あるいは6月となったが、結局5月中開催が主となった。場所は花園町の大地主浅羽靖の所有地でも行われるようになったが、明治32年から小樽公園⁽¹⁹⁾で実施されるようになった。そして明治28年から大正11年まで実施された。それ以後は中止され、稲穂、同女子、色内三校だけは連合を実施し、他校は各校ごとに行った。

種目は、男子手体操、亜鈴体操、綱引、二人三脚、兎飛、札拾い、人運び、女子の豆囊送り、旗送り、遊戯などであった。

しかし「運動会が盛んになるにつれて、参加する児童のために、父兄の方がお祭り騒ぎを演じ、中産階級の者でも男ならば着物、袴は必ず新調し、女子ときたら縮緬の着物に緞子とか博多とかの帯を縦かつぎにさせ、縮緬の帯あげをぶらさげ、それに縮緬のあやだすきを背後で結んで、だらりと下げ、祭礼の行列のごとくにして公園に練り込むという騒ぎなので、如何に下層の者でも唐縮緬の着物に唐縮緬のあやだすきは互い新調したらしかった……当日になれば一つには我が子の自慢と今一つは親達の遊山をかね、重箱詰めの馳走を携えて押すな／＼で見物に出かけ……、当日は全市休業の様に感じた。」「このような華美な服装については大きな批判が出て、学校側からの再々の注意があり、後には申合わせにより、女子は割烹服の様な上着を着用、男子は持合わせのものを着るようになった。⁽²⁰⁾」越崎も書いている。「これは全

(17) 開蒙学校。明治20年7月に村上三郎が信香20番地に開校、のち合併。私立。

(18) 同致学校。明治20年6月に北有社有志により開設、23年1月廃止。私立。

(19) 当初、花園公園と言ったが、小樽公園と言われるようになる。現在は小樽公園。

(20) 『小樽市史』第2巻、412-414ページ。所在は、大津氏に教わる。

小樽の名物で、父兄達は勿論、一般市民も朝早くから座席用の筵を持ち込み、グラウンド周囲のよい見物場所をとるのに一生懸命だった。⁽²¹⁾

明治43年(1900年)8月8日に、北海道汽車博覧会が小樽に来た。道内を巡回したのだった。大正元年12月、小樽の街にはじめてガス燈がともった。

多喜二が入学した年に大逆事件が起き、卒業する年に吉野作造の論文がでる。だから彼の小学校時代は、日本社会運動の「冬の時代」であった。

多喜二が入学して4年後、妹のツギがここに入学する。多喜二がここを卒業するとき、入れ替わるようにして、弟・三吾がここに入学する。それはチマが、庁立高女の3年目が終わる時だった。彼女も多分、若竹町から高女のある花園町まで歩いて通った。多喜二が卒業した翌年、彼のこの小学校は高等小学校を併置し、潮見台尋常高等小学校となった⁽²²⁾。

さて、小樽に桜庭ちか子という人がいた。かつて石川啄木が『小樽日報』記者として「三面をやっていた時、たしか昨年 [=明治40年(1907年)] 拾月末の頃であったと思ふ、三面に入れる挿絵を此人に頼む事になって、其以後二三回逢ったのであったが、予 [=啄木] の知る限りに於て最も善良なる婦人の一人である。」と、啄木は、明治四一年(1908年)一月九日の日記に書いた。「女史 [=桜庭] は今歳二十五になった。」「今潮見台小学校に教鞭を採って居られる。天性画が好きで、所謂才色兼備の、美しい、品格のある婦人」である⁽²³⁾。啄木が誉め上げたこの美人教師は、多喜二の入学した小学校に勤めていたのだ。そして小樽の真栄町(まさかえちょう)に住んでいた。啄木は、彼の友人と彼女とを結婚させようとして、奔走さえしている。ただし、桜庭先生は、後にそれを断わっている。多喜二は明治43年、つまり啄木の記した2年後にこの同じ小学校に入学したのだった。その桜庭先生は、絵の先生だったのであろう。さて、多喜二は彼女に教わっただろうか。

(21) 越崎宗一『郷土史的自叙伝』昭和53年 22-23ページ

(22) 昭和63年(1988年)11月に、潮見台小学校の中に、「郷土資料館」が開設された。

(23) 啄木「明治四十一年日誌」(『全集』第5巻)、199ページ。

多喜二が入学した時、明治43年(1910年)の時点で、潮見台小学校の先生は、次のようだった。校長(初代)有賀光雄、以下、吉田利吉、滋谷孝三、高田和三郎、山田外喜雄、佐久間ミユキ、山田次枝、工藤ノエ、高氏キクノ、桜庭チカ、北野清四郎、近藤昭輔、久保田庸、寺田秀城、山本とよ、高橋丈夫⁽²⁴⁾である。なんと桜庭先生は、ちか子でなく、チカとなっちはいるが、在職中であつた。チカが本名であろう。彼女は明治40年度から44年度まで、たぶん明治45年(1912年)3月まで、潮見台小学校にいた。ここを辞めたのは30歳くらいである。小学校は担任制だから、担任でなければ多喜二は教わらなかった⁽²⁵⁾だろうが、もし、彼女が多喜二の担任となったり、絵の先生であれば、多喜二は彼女に、1、2年生の時、1年か2年間、教わっただろう。姉・チマも教わったであろう。ここでも多喜二と啄木の因縁がある。

多喜二が育った若竹町は、さびれた所であつたが、だんだん人口も増えてきた。そこで新しく若竹小学校が作られた。若竹小学校は、大正15年12月6日⁽²⁶⁾の創立である。妹の幸[ユキ]さんは、大正5年生まれなので、姉や兄のように、初めは潮見台小学校へ通つたのだろうが、途中から、若竹小学校へ行くのである。この創立の日、潮見台小学校は、「新設の若竹尋常小学校へ五学年以下の児童三〇〇名を送る⁽²⁷⁾」と、ある。

多喜二は、小樽に移住してきた時には、ほぼ若竹町が生活圏であつた。小学校に入るまでの2年間ほどが、その時期である。小学校に入って、行動範囲は若竹町と潮見台町とに広がった。庁商に入ることによって、彼の生活範囲は緑町にまで広がった。実際に、古い小樽の中心地のほぼすべてとなつた。

多喜二は小学校6年間が皆勤で、表彰された。小林多喜二が卒業することによって、潮見台小学校は、小樽で最も高名な人物を送り出したという名誉

(24) 『しおみだい』,そして同小学校に掲示されているプレートから,作成してみた。

(25) 琴坂,口頭で。

(26) 小樽市教育委員会,森さんに調べていただいた。

(27) 『しおみだい』潮見台小学校発行

を持ったのである⁽²⁸⁾。

16 港工事，運河，情勢

日露戦争の結果，南樺太が領有され，小樽の商圈が拡大していた。道内・樺太の生産物は，船・車〔＝荷車〕により，小樽港に集散され，ここから本州・外国へ積み出され，また道内・樺太での消費品・化学原料が，本州・外国から入ってきた。これら取引の大部分は小樽商人の手で行われた。樺太への移入品の半分，樺太からの移出品の3分の1は小樽港を通った⁽²⁹⁾。こうして，三井物産と，神戸の曲辰（かねたつ）鈴木商店は，小樽に出張所を置いたほどである。明治32年には小樽は開港場に昇格した。

「明治25年，北海道長官になった北垣国道も，西海岸道央部に位する小樽港の将来性を認め，26年夏，内相井上馨の来樽と相まって，築港工事の基礎調査をした。その結果，良好な見通しを得たので，29年の国会に十ヶ年継続事業費21万8千余円が協賛され，30年4月から第一防波堤工事に着手した。⁽³⁰⁾」小樽は天然の良港と言われるが，実際は湾形が広すぎるために，強風に見舞われると，船舶を転覆・大破されることがあった。これを防波堤によって阻止できるようになる。

小樽では，第一期に引き続いて，第二期の港湾防波堤の工事が行われた。1908年(明治41年)に北防波堤が，1921年(大正10年)に南防波堤が完成した。

多喜二の家は前述のように，この工事にしたがって引越しをし，彼の小学校時代は，現在の家跡——若竹町18番地とされる——ではない。

多喜二が小学校に入学した年に，小樽の特徴となる高架栈橋が作られ始める。彼が小学校4年生のころ，大正3年(1914年)に小樽では，現在有名となる運河工事が始まった。20年も，埠頭岸壁式埋立か，運河式埋立かで争っ

(28) 資料2点を，潮見台小学校教頭・眞壁先生より戴いた。

(29) 越崎宗一『郷土史的自叙伝』昭和53年 19ページ

(30) 同

ていた運河が、大正3年に決着したのである。運河は1923年（大正12年）に完成し、幅40m、長さ1,314mのものとなった。小樽区が防波堤や運河を作ろうとすることは、国や道庁が小樽の開港に見込みを持ち、また小樽経済が発展し、発展するだろうと思っていることであつた。第一期・北防波堤と小樽運河建設の指揮をしたのは、広井勇である⁽³¹⁾。

世界では1914年に、第一次世界大戦⁽³²⁾が始まつた。それにより、小樽は、経済的に繁盛し、その歴史で最も活動的な時代を迎えた。1916年の、多喜二が小学校を卒業する年は、世界はまだ第一次大戦の時代であつた。それは1918年まで続くのである。越崎は云う。「大正三年夏、第一次大戦勃発。日本も参戦することになったが、我国は高見の見物。特にこの大戦で、雑穀澱粉などの本道農産物に対する海外受容が激増し、小樽は、本道農産物輸出港として、空前の活気を呈することとなった。⁽³³⁾」

町が発展していることは、一人の思想家にとって重大なことでもある。例えば、アダム・スミス（経済学の創始者）とグラスゴーの例を引くことができる。18世紀前半に、スコットランドのグラスゴーは大いに発展していた。アダム・スミスの成長は、彼の知的成長の基礎を作つたグラスゴーの発展なしには考えられない⁽³⁴⁾。

多喜二の時代は、啄木の論じた以上に小樽が発展していた。この雰囲気が多喜二に大きな影響を与えたことはうたがいない。

なお人口の上で、かつての小樽は、今以上だったと云える。現在の小樽市

(31) 工学博士広井勇が北防波堤と運河を構想した。札幌農学校第2期生、道庁技師になる。1897年に小樽築港事務所長になる。後、東大教授になる。『工学博士広井勇伝』工事畫報社 昭和5年

(32) さしあたり、テイラー『第一次大戦』新評論、を見よ。

(33) 越崎宗一、30-31 ページ

(34) アダム・スミス (Adam Smith, 1723-1790) は、グラスゴー大学で学び、スコットランド啓蒙思想の「洗礼」を受けた。オックスフォード大学で学ぶが、その後、グラスゴー大学教授になる。そしてその際、名著『道徳感情論』を書くのである。

の人口は、16万1,114人⁽³⁵⁾である。だが、張碓峠から札幌寄りの地域と、高島より外の地域を差し引けば、ほぼ13万7千人となる。ただしこれは当時の小樽区よりも少し広く地域である。日本の人口は現在（1993年）約1億2千万人である。当時の日本の人口は、1912年（明治45年・大正1年）に5,252万人、1920年（大正9年）の第一回国勢調査では5,596万人である。小樽の人口は、1920年（大正9年）に10万8千人であった。当時と現在の、小樽人对日本人の比率は、当時の方が現在よりも高く、ほぼ2倍にはなるだろう。

彼が物心のついた時代に、小樽が最も活動的であったことは、彼にも影響を及ぼさずにはおこななかった。そして一番重要なことは、大正デモクラシーであった。

17 大正デモクラシー

—— 多喜二の生涯を、大きい観点から把握する一方法

多喜二が小学校を卒業するころ、大正デモクラシーの波が訪れた。彼は、大正デモクラシーの中で育ち、かつ生きた。

大正デモクラシーの象徴的人物は、吉野作造だった。ヨーロッパ留学から帰った東京帝国大学教授吉野作造は、ヨーロッパで絶対君主制が立憲君主制に変わって行くのを見て、日本の天皇制も性格を変えねばならず、また民衆の秩序ある運動を勧めるよう、説いた。1916年（大正5年）に論文「憲政の本義を説いて其有終の美を齊すの途を論ず」を発表した。そこでは人民主権説ではなくて、民本主義を述べて、民衆のための政治と民衆による政治を説いた。これをきっかけにして大正デモクラシー⁽³⁶⁾が始まった。ただしこの言葉は第二次大戦後に作られたものである。一方、美濃部達吉は天皇機関説を出した。美濃部は民主主義的というよりも、合理的というべきで、また、天

(35) 「小樽市住民基本台帳人口及び世帯数（町名別）」小樽市役所、平成5年8月末現在、から。

(36) 『日本の歴史』27 小学館

皇制に批判的な立場でもない。吉野は行動でも活躍し、政府・軍国主義への批判をおこなった。1918年12月に、デモクラシーを宣伝するための「黎明会」が、吉野、福田徳三を中心に、新渡戸、穂積重遠、朝永三十郎、大山郁夫、麻生久、三宅雪嶺、森戸辰男ら23人によって出来た。そして学生側では、東大で「新人会」が同年12月、早稲田大学でも「民人同盟会」^(36a)が翌年3月に、結成された。1920年には日本最初のメーデーが東京で行われた。

小林多喜二の生涯を日本史の中で考察するならば、次のように見なければならぬ。

幸徳事件による「冬の時代」が過ぎ去り始めた。だが多喜二が小学校を卒業し、つまり庁商に入学するころから、この「大正デモクラシー」が始まった。多喜二はこの雰囲気と流れの中であって、大正デモクラシーで育った。一方、大正デモクラシーは、民主主義思潮としては、ある意味では、たいしたことはなかった。日本の国家的根本構造、つまり国体は変わらなかったし、この大正デモクラシーは、後にファシズムによって潰されてしまうからである。日本近代史の上では、大正デモクラシーの一時期に、世界の流れと同じく、日本は少し民主主義的な発展をした。それは質の上でも量の上でも充分ではなかった。だがそれでさえこれらの発展が、日本帝国主義・軍国主義の進展によって、ことごとく壊滅されてしまうのである。治安維持法をはじめとする日本の絶対主義天皇制の弾圧機構は、初め共産主義運動、次に社会主義運動、つづいて非天皇的宗教、そして反戦主義、平和主義、その後、民主主義、自由主義、ヒューマニズム、合理主義を圧殺してしまうのであり、それは徹底的で根こそぎの弾圧であった⁽³⁷⁾。冬の時代と一五年戦争とのちょうど中間に、弱々しい大正デモクラシーの花が咲いた。それは、嵐とともに踏みしだかれる民主主義の可憐な花であった。多喜二の悲劇は、近代日本民主主義の運命と軌を一にし、結びついていった。彼も、怒涛のような逆巻く波に消された美しい花であり、犠牲である。

(36 a) のちに、「建設者同盟」となる。

(37) 参考、荻野富士夫『特高警体制史』増補版、せきた書房 1988年

補遺と訂正

1. 前号(41 ページ1行)で、村林みのすけ、としたが、おそらく巳之吉である。
2. 前号(29 ページ)で筆者は、多喜二が1903年10月13日生まれだと、何気なく書いた。「年譜」で多喜二はいう。誕生日を「母は旧暦八月二十三日だと云っているが、村役場の帳面には一二月一日となっている。」(『全集』第5巻230 ページ)旧暦と新暦との違いだろう。尋常小学校第4学年修了の、大正3年3月24日付の、多喜二の修業證書が残っている。そこでは彼は、戸籍通り、明治36年12月1日生まれとなっている。
3. 前号(42 ページ)で、3箇所、19, 20, 21 行目で、印字を間違った。「板屋」は間違いであって、「板谷」が正しい。商大図書館の浜田さんに見つけていただいた。ありがたいことである。
4. 前号(61 ページ, 1行)で、長橋中学と書いたが、現在名であり、長橋に小樽市立中学ができたのである。1922年(大正11年)に小樽が市になったので、「市立」である。ここに伊藤整が勤めるので、有名である。
5. 前号(34 ページ)で、青函連絡船で、と書いたが、1908年に青函連絡船が始まるので、多喜二一家が来たのは、青函連絡船ではない。それ以前の制度の連絡船である。なお、1904年に小樽・函館間鉄道が開通した。
6. 私立北海道水産学校について、前号(61 ページ)で述べたが、これは数年で廃校になった。したがって庁立水産、今の小樽水産学校とは関係がない。
7. 多喜郎は10月5日没。慶義は1859年10月10日-1931年6月20日。ツネは1826年11月5日-1904年11月11日。末松1865・9・9-1924・8・2。セキ1873・8・22-1961・5・10。(高橋利蔵「史談会史料 郷土史研究のための資料断片(4)小林多喜二の周辺」より)慶義の子孫は、この付録2に掲げる。

9. 前号 31 ページ 4 行目で、はずのの、とあるが、はずの、である。
10. 小樽に来た人として、なお、新撰組の永倉新八がいる。明治 10 年ころ小樽に来て、名を変え、明治 15 から小樽を離れ、32 年に小樽に戻り、大正 4 年に死んだ。
- また明治元年箱館戦争で、脱走軍の彰義隊士らが、小樽に来て、本陣を龍徳寺に、また正法寺にも分屯した。翌 2 年に降伏した。
- 内村鑑三は、明治 14 年札幌農学校を卒業し、開拓使御用掛となり、あわび養殖のため試験所を高島郡祝津に定めた。明治 15 年 9 月 4 日から 28 日まで、滞在した。
- 林有造も小樽にいた。自由党員で、岩村道庁長官の弟である。色内町手宮町の海岸のうめたてをする。時の政府から激しい圧迫を受け、北海道に難をのがれていた。実業家であり、明治の自由民権運動で獄につながれた。そして、名著『旧夢談』（明治 24 年）を書いた。
11. 多喜二の手紙について。小樽文学館・玉川氏によると、多喜二の大熊信行あて手紙が、東京で市場に出て売られたという。なお、多喜二の友人だった石本氏が亡くなり、ご遺族が遺品を整理していたら、友人片岡亮一から石本さんあての葉書（大正 10 年消印）が 2 通出てきて、それは小樽文学館に寄贈された。
12. 碧川企救男の後任として小樽新聞に入社したのが、加藤米司（1866-1921）である。岐阜出身で、青年時代に堺利彦と親交を持った。のちに「函館毎日」へ行く。ペンネームは、眠柳。
13. 前号で、南カラフトの材木が乱獲されたと書いたが、現在も乱伐されたままであると、言う。これでは、日本商人はとても信用されないだろう。
14. 前号（43 ページ）で、小樽と鯨について記したが、余りに簡単で、不十分——誤りかもしれない——なので、一言する。有難いことに、琴坂先生のご指摘があった。

明治 20 年代、30 年代、小樽付近では鯨漁が盛んであった。それでも年によっては、好・不漁を繰り返していた。第二次大戦中でも少し鯨は来たが、

昭和21年に本当にとれなくなった(琴坂，口頭で)。昭和20年代に少しとれた。30年以後，鯨は小樽の浜から完全に姿を消した。(『おたる再発見』北海道新聞社 18ページ)

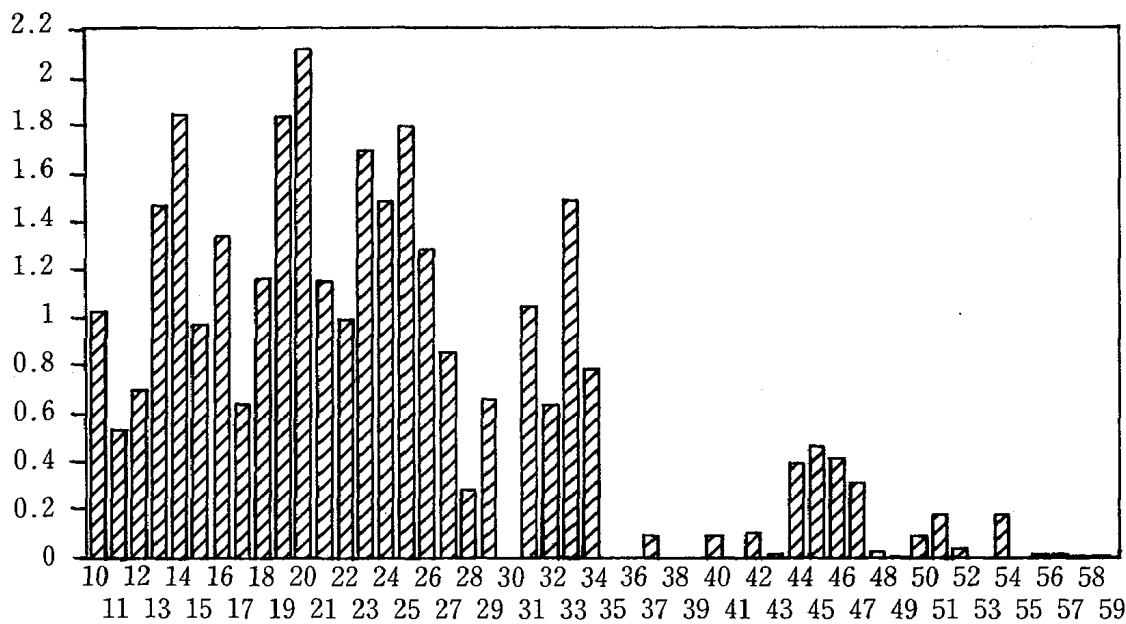
さしあたり，今田光夫『ニシン文化史』共同文化社 1986年 257ページの表と，そこから私の作ったグラフを掲げる。

付録1

		北後志 ⁽³⁸⁾ 春鯨漁獲量		(単位百トン)	
西暦年		1926	1290	1943	8
1910	1020	1927	855	1944	390
1911	532	1928	278	1945	465
1912	698	1929	660	1946	405
1913	1463	1930	—	1947	308
1914	1845	1931	1043	1948	15
1915	968	1932	630	1949	—
1916	1343	1933	1485	1950	83
1917	630	1934	788	1951	173
1918	1163	1935	—	1952	30
1919	1838	1936	—	1953	—
1920	2115	1937	83	1954	173
1921	1155	1938	—	1955	—
1922	983	1939	—	1956	8
1923	1695	1940	83	1957	8
1924	1485	1941	—	1958	—
1925	1793	1942	98	1959	—

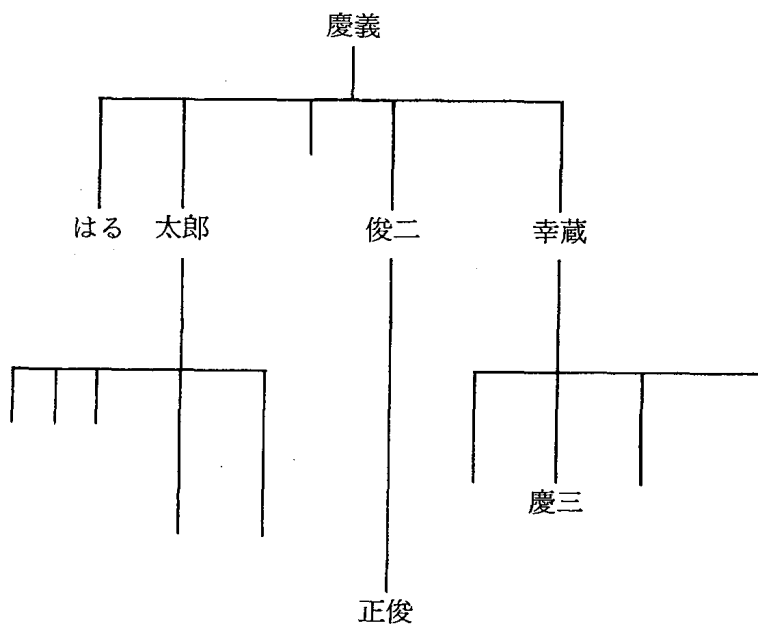
(38) 小樽は北後志の一部である。

単位・10万トン



(西暦年, 19--)

付録 2 小林慶義家系 (高村宏先生の手紙より)



第2章 庁商時代

1 庁商入学

北海道庁立小樽商業学校、つまり庁商は、1913年（大正2年）に創立された5年制の甲種商業学校である⁽¹⁾。北海道ではなく、当時は北海道庁であり、それが立てたから、庁立という。小樽には私立の小樽商業学校（現在の北照の前身）があったので、それと区別するために、庁商と呼ばれたのであった。予科2年、本科3年であり、1学年100人の定員であった。多喜二が受験する時は、出来てからほとんどすぐの新しい学校であった。

すでに述べたように、商業都市としての小樽に、当然、庁立甲種商業校が1日も早く設立されることを要望する小樽財界実力者、例えば、山本厚三、本間隆吉、寿原重太郎、前市長河原直孝たちは、助成会を作って、道会や道に働きかけた。青木乙松、板谷宮吉、榎本武憲、寺田省婦たちが、敷地を提供した。庁商の設立はその結果でもあった。日清戦争後、一応事業の安定を見出した小樽の初代実業家たちには、二代目を進学させるべき中学校設立を要望する声が、ようやく起こっていた。越崎宗一^(1a)は、多喜二に2年早く、大正3年に庁商へ入学した人である。商人である彼の父は、「お前は商人の子だから、商業学校なら入れてやる。しかし入学試験に落ちたら小僧に出すぞ。⁽²⁾」とおどかした。

この当時、中学校へ行く生徒の比率は極めて少なかった。小樽中学が北海

(1) 明治終りに、甲種中等学校は乙種にくらべて、高学齢生徒を対象としている。大津氏によると、昭和では例えば、庁商は庁立で、北海商学は私立なので、前者は甲種、後者は乙種と呼ばれていたと言う。

(1a) 越崎家は石川県出身。祖父が小樽に来た。宗一は、明治34年7月、小樽区港町（現在の堺町）の商家の長男として生まれた。量徳小学校へ明治41年入学した。庁商、高商、東京商大に学ぶ。昭和51年没。多喜二の2年先輩である。

(2) 越崎宗一『郷土史的自叙伝』昭和53年 28ページ

道で最も早く創立された中学の一つとしてすでにあり，またその創立は十年以上前であった。だから庁商は新興学校であったけれども，この頃，全道有数の競争率の激しい中等学校になった。多喜二が受験した時は第四期生であるが，競争率が4・5倍もあった。

同じ受験者で，多喜二の同級生となる安宅文夫氏⁽³⁾は，受験者が435名だったと記憶している。『樽商六十年の歩み』ではこう記述されている。「小林多喜二が受験した第四期の頃などは，百名の募集にたいして八百名も殺到したので，小樽新聞に『娘一人に婿八人』の記事が出たほどの受験難だった。⁽⁴⁾」手塚氏は，450名前後だったと，書いている⁽⁵⁾。若い頃の記憶はかなり正しいと思うし，当の本人なので，安宅氏の挙げる数が正しいのではないかと，私は考えている。

彼の同期生石本武明氏⁽⁶⁾は，書いている。「全道から優秀な生徒が入学をめざした……入学には骨が折れた。庁商に入学できる者ならどこの学校にも入

(3) 安宅文夫先生の略歴。

1903 (明治36) 年	小樽生まれ
1916 (大正5) 年	小樽稲穂小学校を卒業し，庁立小樽商業学校に入学。つまり多喜二と同学年生である。
1921 (大正10) 年	庁商卒業
1922 (大正11) 年	小樽高商入学。つまり多喜二に1年遅れて入学。
1923 (大正14) 年	高商卒業
1933 (昭和3) 年	道立小樽商業高校の教員になる。昭和17年まで。
1946 (昭和21) 年	小樽商業高校の教頭になる。昭和31年まで。

(4) 2 ページ

(5) 手塚英孝『小林多喜二』新日本出版社 (以下，手塚と略す)，上，36 ページ

(6) いしもとたけあき。氏は，後に本稿で度々登場する。5男2女の7人兄弟で，次男である。庁商を卒業して(旧)北海道銀行に入る。昭和25年3月，拓銀を中途退職した。ちなみに，旧北海道銀行は，拓銀と合併した。ご家族によると，「自分の名誉欲」で退社したと云う。昭和26年から29年まで北日本本印刷紙業に勤める。種々の会社の経理をした。経営士開業の方針を決め，昭和34年に日本経営士の資格をとり，商店の経理をした。昭和37年加藤鉄鋼建設工業とコンサルタント契約をし，昭和42年に経理の相談をする。昭和49年その社長となり，80歳まで現役でいた。平成3年小樽から苫小牧に移り，1993年8月13日に亡くなる。(氏の令嬢・岩田典子さんから小生あて1993年の2通の手紙による)

学できるといわれ、事実試験は難しかった⁽⁷⁾。

後に多喜二の親友になる嶋田正策（せいさく）氏は、小樽の量徳尋常高等小学校に明治四〇年三月に入学し、大正四年三月に高等科を卒業した。小学校六年で北海道庁立小樽商業学校（庁商）に入学手続き（受験手続き）をしたが、受験せず、翌年受験し不合格になり、その翌年つまり大正四年四月に入学した。氏に一年遅れて多喜二が入学するのである。

多喜二を含めて三人の少年が、皆、塩見台小学校から庁商を受験しにきたのだが、雪の中を笑い転げていたのが、正策氏が初めて多喜二に会った時であり、それは紅葉橋通りであった。この時、多喜二が一番元気で、ふざけていた。嶋田正策はこう書いている。入学試験の時であった。「緑町の入口を三人の少年がふざけながら歩いている。出身校と名前を聞くと、潮見台小学校で、その内の一人が雪道を転がるようにしてふざけていた。それが小林多喜二だった。」その2人とは、三室と加藤だった⁽⁸⁾。しかし多喜二以外は、浪人した人も出たが、結局だれも合格できなかった⁽⁹⁾。

嶋田氏はこうも書いている。「庁商入学試験のため、小樽花園公園を横切って紅葉橋を渡り、まっすぐ稲穂町の小路に入る所」で、嶋田は同級生の高橋次郎⁽¹⁰⁾と登校途中で⁽¹¹⁾、多喜二に会った。嶋田氏は他の場所では、緑町と書いている。現在地で言えば、緑町が正しい。ただし、当時は稲穂町であった。この時、嶋田は庁商予科1年生であった。

この嶋田氏⁽¹²⁾のおいたちは、こうである。

(7) 石本武明「若いころの多喜二との思い出」（小樽文学館「多喜二の青春」昭和五八年）

(8) 『北方文芸』1968年3月号

(9) 嶋田氏インタビュー。嶋田正策「小林多喜二のこと」（『小林多喜二読本』啓隆閣 1970年、236ページ）

(10) 後に小樽高商に入り、卒業。東北大卒で、小樽高商の教授になり、日本スキー連盟の審判長であった。昭和19年の論文「大東亜共栄圏」でページにあう。戦後まもなく昭和27年に逝去する。

(11) 嶋田「本郷だより」18号

(12) 氏は現在、お元気で神奈川県に在住である。以下の話の主な部分は、小生との

嶋田正策氏の父は、富山の妙教寺という小さな寺の出で、名を義正といた。父の兄は団正といい、千正寺を千歳に開いた。父は、空知の北村へゆき、村役場の書記になり、養蚕を広めた⁽¹³⁾。正策氏は、明治三四（1901）年一月一日生まれで、姉チエ（千枝）と弟二人（末の弟は正巳（まさみ））がいた。

四歳の時、祖母しず，に連れられ，母・コマの兄である伯父，稲葉吉五郎を頼って小樽に来た。伯父は実子が無かったが，養子太三郎（たさぶろう）がいた。彼は，友人長島の子息で，当時，北海商業学校の生徒だった。ただし，正策は函館へ行って父と半年，利尻島の鬼脇で父と半年，生活したことがある。函館へは，小学校1年生くらいの時，祖母に連れられて行った。その頃，太三郎は亡くなった。伯父は学問をしていなかったが，子供たちには教育が必要だと考えていたらしい。この伯父は，正策が四・一六事件（1929年）で執行猶予で自由になった直後，亡くなった。

手塚は，小学校時代の多喜二をおとなしい子としているが，そうではなかったのではないか。

大正5年（1916年），多喜二は庁商に合格し，入学した。父は大層喜んだ。

インタビューおよび1989年の小生あて同氏の数通の手紙からなる。それゆえ引用・利用文献の指示のない部分は，それらによっている。

嶋田氏の作品には次のものがある。

「小林多喜二とのこと」（多喜二・百合子研究会編『小林多喜二読本』新日本出版社 1974）

「小林多喜二の思い出」（『小林多喜二読本』）

「小林多喜二と私」（『小林多喜二研究』解放社 1948年，復刻 日本図書センター 1984年）

「『ネヴォ』の思い出」（佐藤八郎著・編『ネヴォの記』1976年）

「小林多喜二の恋」（『民主文学』新日本出版社 1988年2月号）

「私の『自画像』を書いたころ」（『民主文学』）

文集『自画像』——このコピーは小樽文学館に送った，と嶋田氏。

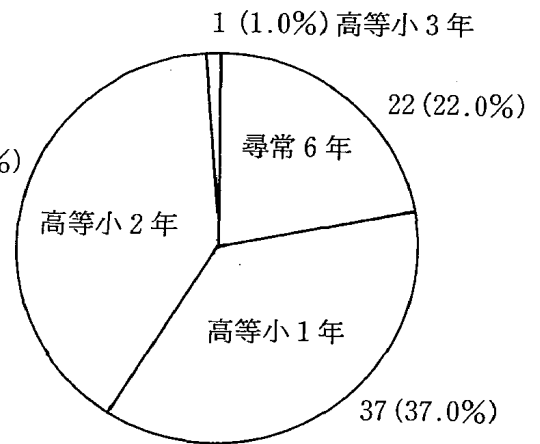
「小林多喜二のある一面」（『緑丘』）

「『クラルテ』の思い出」（『本郷たより』18号，不二出版）

「私の小林多喜二」上・下，小林多喜二全集，月報2および3

(13) 嶋田は，父を養蚕学校の先生だったとも書いている。（「小林多喜二とのこと」236ページ）

形式上、庁商は小学校6年終了で受験できる。だが、難しいために、ほとんどは高等小学校から入った。例えば、第4期である大正5年度入学、つまり多喜二の入学した時には、尋常6年に入ったのは22名、高等1年修了が37名、高等2年修了が40名、高等3年修了が1名、計100名である⁽¹⁴⁾。多喜二のように尋常6年に入ったのは2割強であるということになる。



だから多喜二もずいぶん勉強のできはよかったのである⁽¹⁵⁾。また庁商には、小学校でも、小樽の有名な小学校から入ったのであって、多喜二のような例、潮見台小学校からの入学は少なかった。大体、塩見台小学校からゆくような生徒は滅多にいなかった。その事情は、多喜二は「地区の人々」で書いている。これを現実の小学校名に変えて書いておこう。

「私が上の商業学校に入った時だった。新しい先生が、私たちが何処／＼の小学校から入ってきたか、手を挙げさせて調べたことがあった。『稲穂小学校からは?』と先生は最初に言った。五十人のうち三十名近くも手を挙げた。稲穂小学校は、市の中央の一番金持ちの多い、評判の学校だった。先生は次々と呼んでいった。私は潮見台小学校からは来ているものの、実は内心得意だった。何故なら私はそこからたった一人しかパスしていなかったからである。私は先生の呼ぶのを心を躍らせながら待っていた。呼んだら思いきり手を挙げてやろう、先生はキッと吃驚してくれるだろう。残っている学校が四つ、三つ、二つ……となると、私の心臓は思わず跳ね上がった。ところが、先生は潮見台小学校を忘れていた。この次にと行って、胸のところまで勢いよく

(14) [田中孝]『緑陵五十年史』昭和39年11月、小樽緑陵高等学校発行 38ページ
[緑陵高校とは、現在の北海道立小樽商業高校、つまりかつての庁商である。]

(15) 小学校時代の多喜二の成績は、手塚、上、195-6ページに掲載されている。

持っていった手を、——私は急にドマつき、赤くなり、それからソツと机の下におろした。私は周囲を見廻した。だが、誰も私のことを気付いてさえもいなかった。……先生は、じゃあ、何頁を開いて下さいと言って、モウ授業にかかっていた。私は本を開いた。が、一つ一つの活字が眼の前に浮き上がり、重なり合い、読むことが出来なかった。——私は本の上に、ポタ、ポタと涙を落していた。⁽¹⁶⁾」この状況は、もちろん現在の小樽では違っている。

入るのが難しいことに加え、庁商は、入学しても進級するのが難しく、約半分の者は、5年間では卒業できなかった。そういうわけで、多喜二の同級生にはずいぶん年上の者が多かった。また越崎の談であるが、初代校長の頃は、生徒は猫をかぶっておったかもしれないが、極めておとなしく、学問的であった。」西岡徳蔵も語る。「上級生の下級生に対する態度も極めて温和であり、何れも紳士的なものがあつた。⁽¹⁷⁾」

庁商は、現在の北海道立小樽商業高校の前身となるが、今の緑町にあって、小樽高商のすぐ下に位置していた。カラマツの森林に囲まれ、小樽市街と小樽港が展望できる高台にあつた。多喜二はここに入学し、親の家を離れ、伯父の家に寄寓し、その工場で働き始めた。通学させてもらう代わりに条件である。寝泊りは伯父の家である。そこには長男慶蔵の、多喜二とはほとんど同じ年代の子供たちも、一緒であつた。

時はなお、第一次大戦中であつた。

2 伯父の家で

さて多喜二は、条件付きで進学して良いことになった。それは、伯父の家に住み込みで働きながら通うことであつた。多喜二は、新富町の伯父の家から150mほど下にある工場で働いた。ここは、彼が通っていた潮見台小学校

(16) 『小林多喜二全集』新日本出版社（以下、『全集』と略）、第4巻 456ページ

(17) 田中孝『北海道庁立小樽商業学校史——史料と体験の歴史』青玄社 昭和23年 16ページ

から近かった。

この店・工場は、小樽では大企業であった。当時、パンは珍しいものであって、舶来の感じがした。伯父の店では、安い菓子パンの類が戦争景気で沢山売れた⁽¹⁸⁾。現在龍徳寺の前にある伯父の店といわれるものは、パン工場である。そして小樽中学校下の崖下にある伯父の家が店そして住家になっていた。住家と工場とは 100 m——前述のように 150 m でない、という人もいる——ほど離れていた。伯父の工場から軍隊に多量のパンが納められた⁽¹⁹⁾。

多喜二は、朝、登校前にトラックや荷車で、パンの配達をし、学校から帰っても働いた。多喜二は、後に手塚に語ったのだが、働くのは楽しかった。彼は工場で働く人に親しみを感じていた。しかし職人たちは、親方の身内だといっているので、冷たかった。また、住み込みなので、伯父の家でも辛い生活であったし、遠慮や引け目があった。小説「健」には、食事を従兄弟の子が先に食べる情景を書いている。

学校へ行かせる代わりに働いてもらうという条件は、姉チマの時には出さず、多喜二の時だけ出すのは、不思議である。チマが女であり、働かせるわけにゆかず、多喜二が男だから働かせることができると、考えたからだと思われる。

多喜二の働いていたパン屋について、伊藤整は述べている。

小樽中学校では厳禁されていたのだが、多喜二の居たパン屋には、「十分間の休憩時間や昼の休みに、我々 [小樽] 中学生がこっそりパンを食いに掛けた⁽²⁰⁾」。

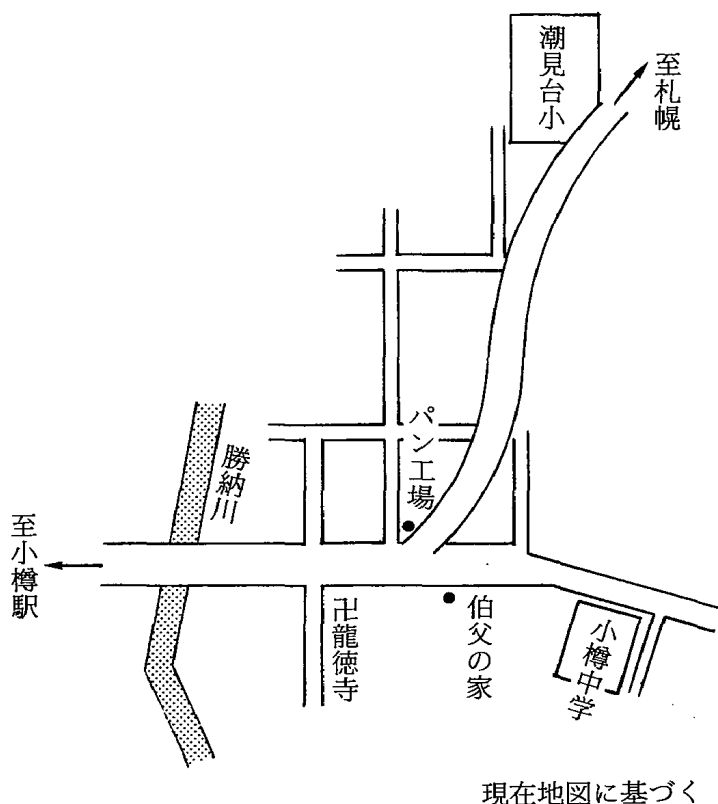
当時、三星のパン屋で売っている代用パン（金時豆が入っている）が有名で、樽中の生徒がさかんに買って食べていた。

当の多喜二は弁当として、ビルマ豆の入っているパンをもって行って、昼

(18) 小笠原

(19) 小樽市立文学館、木之内氏。

(20) 『伊藤整全集』第二三巻 31-32 ページ



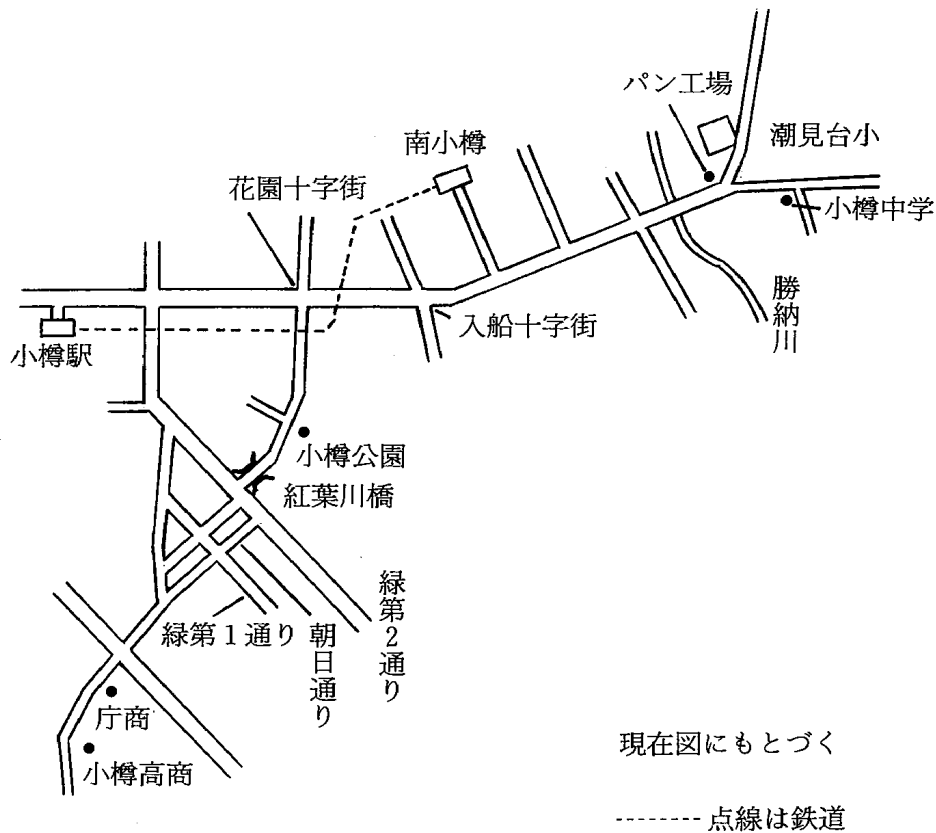
食として食べた。これは珍しかった。

多喜二は、伯父の家から実家にはほとんど帰らなかった。帰ったのは、休みの時だけだった。そして夏休みには家計を助けるためにアルバイトをした。それは、港で、潜水夫へポンプで空気を送る仕事であった。これは、人間の命にかかわるものなので、気が抜けなかった。

3 通学

多喜二は、伯父の家に居るときは、もちろん徒歩通学だった。朝起きて、住んでいる家つまり伯父の家——新富町五八番地——で朝食をとり、店で働き、そこから庁商あるいは高商へ通った。帰ってからも店で働き、夕食後は、絵を描いたり、後の時期には小説を書いたり、または働いた。一カ月のうち三日は、帳面付けで、とても忙しかった。

琴坂氏によれば、多喜二の通学路は次のようだったと言う。市内に入っからは、花園十字街から左に折れ、小樽公園に向い、この丘を越えて、紅葉橋を渡り、朝日通りを抜けて、地獄坂⁽²¹⁾へ出る。なるほどこれが一番近い。



恐らく多喜二は、歩いて40～50分は掛かっただろう。当時の少年たちは健脚だった。

当時の通学方法は、三つあった。まず、いわゆる「汽車通（きしゃつう）」である。多くの方は色内駅で降りる。今の日本銀行と文学館との間の道（緑山手線）に昔の鉄道線路が横切っているが、色内駅はその交点にあった。小樽築港駅の近くの学生は、もちろん築港から乗り、色内駅で降りるのである。次に、汽車通をしないで徒歩で通う人がいた。第三は、両方の方法で、つまり歩いたり汽車に乗ったりして、通学するものである。

多喜二は、伯父の家の時代は徒歩通学をした。彼は居候なのである。高商の時代は、それも実家から通った時代は、汽車通学だったとされる⁽²²⁾。とい

(21) 琴坂先生の説によれば、地獄坂とは、正しく言えば、今の「緑第一大通り」と「商大通り」との交差点から、商大まで、の道である。

うのは、高商時代に武田暹は、汽車で時々多喜二を見ている⁽²³⁾からである。

作家、伊藤整⁽²⁴⁾（正しくは、ひとし、普通は、せい）による多喜二像を試みよう。

毎朝、伊藤は塩谷から小樽の中央駐車場で降り、そこから小樽中学へ通った。ただし、時間の都合で中央駐車場で降りないで、南小樽でおりにくこともあった⁽²⁵⁾。以下は、自伝小説⁽²⁶⁾と銘うたれた『若い詩人の肖像』からである。だから全て事実だというわけでもない。そして彼は多喜二よりも1年若く、この記述はそれゆえ、多喜二が庁商2年から5年の間のことである。

「中学校に近づくと従って、その中学校へ登校する生徒の数が増し、かなり広い町通りが中学生で埋まるようになる。毎朝きまって、その頃、小柄な、顔色の蒼い商業学校の生徒が、肩から斜に下げたズックの鞆を後ろの腰の辺へのせるように、少し前屈みになり、中学生の群の流れをさかのぼる一匹の魚のように、向こうから歩いて来た。」

「そのうちに、私は、その商業学校の生徒が、私たちの中学校の坂の下にある小林というちょっと大きな菓子屋兼パン製造工場から出て来ることに気がついた。あのパン屋の息子だな、と私は考えた。」ここで言う「息子」は、多喜二であるが、もちろん息子は間違いで、甥である。伊藤はこの時、知らないのである。

「その蒼白い細面の商業学校生徒は、広い街上一面に群れてやってくる中

(22) 「略年譜」(新潮日本文学アルバム『小林多喜二』新潮社 1985年 105ページ、を利用しておく)

(23) 武田「回想の小林多喜二」

(24) 伊藤整(1905.1月-1969)は、小樽中学を卒業してから小樽高商へゆき、高商では多喜二の一年後輩であった。

(25) 琴坂

(26) 伊藤『若い詩人の肖像』新潮文庫 1979年、374ページ

この書は小説である。だから事実だけでなく、フィクションが多く混じっている。別項で分析するつもりである。

学生たちの真中をさかのぼって歩きながら、いつも何となくナマイキな顔をしていた。」多喜二がこの頃、ナマイキな顔をしていたことは、庁商の友人蒔田栄一も言っている。もちろん意欲的に生きようと思っていたので、それが表情に出ていたのかもしれない。しかし伊藤はこう思いをめぐらす。「この港町は、商業地なので、後に出来た商業学校の方が受験率が高かった。中学校の受験者が採用人員の三倍ある時、商業学校は三倍半ある、という程度に、少しずつ商業学校の方が難かしいので、商業学校の生徒は中学生よりイバル傾向があった。あいつはそれで少しナマイキな顔をしているのだ、と私は思った。」

多喜二が商業学校を鼻にかけていたのではなかろう。実は、小樽中学生の方が、庁商生をほんの少し見下していたのだった。小樽中学の方が庁商よりも歴史が古く、それに、より進学校だからである。

後に組合運動で多喜二と友人になるのが、風間六三だが、彼は多喜二よりも4歳若かった。彼は明治41年11月に、小樽の色内町に生まれ、父は新潟出身で、雑穀仲買商、母は海産問屋の女中であって、兄と妹がいた。風間の父は割合成功していた仕事が大正時代のパニックで、破産寸前になったため、兄を教員にさせ、妹を高女に入れた。風間は、緑町で育ち、稲穂小、そして小樽中学に入った⁽²⁷⁾。そこで彼も、小樽中学への通学途上、多喜二に毎日すれちがっていた。「私はその姿をみているが伊藤整のようにナマイキとは感じなかった。」と言う。「小林が商業3年の頃、機械体操で右脚を怪我してから歩き方が変わったときいている。肩で風を切るような歩き方はそのせいだと思っている。」

整は続ける。「しかしその少年は、何となく風采が上がりず、貧弱で、いつも疲れたような顔をし、鞆を後ろに背負って、配達夫のようにセッセと歩いた。」

(27) 笠井清「小林多喜二と風間六三」(『北方文芸』)

風間も書く。多喜二は「肩から白いズックの鞆を下げ疲れているように歩いていた。労働の疲れに耐えて歩行していたのだと思う。」多喜二は、小樽公園の裏側の紅葉橋で雪の降る日などは、一人しか通れない狭い、通行人が作った雪道を、足元に注意しながら、商業学校のある地獄坂への近道を歩いていった。風間とはしょっちゅう肩と肩がぶつかってすれちがった。やがて彼は蛇腹の入った小樽高商の帽子を被り、相変わらず地獄坂をめざして歩いていった⁽²⁸⁾。

整はいう。「三木露風が詩の選者をしてる『中央文学』という投書雑誌があって、それにしばしば当選する平沢哲夫というのと、小林多喜二というのが小樽市に住んでいることに私は気がついた。……そしてその頃、その投書で毎月のように一、二位を得ていた平沢哲夫が、私の姉の友達の弟だ、ということが分かった。そして私は平沢と手紙のやりとりをした。多分彼の返事によって、私は毎日中学校の坂下のパン屋から出て来る顔の青い少年が、その投書家の小林多喜二であることを知った。私はしかし、生来の内気さから、その頃遂に平沢哲夫にも逢わず、従って彼の仲間なる小林にも紹介されなかった。しかも私は毎日その小林多喜二とすれちがっていた。⁽²⁹⁾」

4 親孝行

小林多喜二は親孝行であった。当時近所に住んでいた三浦さんは、多喜二は親孝行だったと言う。だから近所でも知られていたのである。これは小学校時代の多喜二が、それに類したことを言っていたのか、母の発言が知れ渡ったのか、であろう。

ただし、現在よりも昔の日本の方が、親孝行の度合と例が多いように思える。人間はあまり豊かになると、親孝行の度合がうすれることがある。

多喜二は、「一二、三の頃海軍の青年士官になることを本気に考えた。」と

(28) 風間「二人の作家との出会い」『北方文芸』1978・1

(29) 伊藤，18-19，22-23 ページ

書く。それはつまり、庁商に入ったか入らないかの頃である。また日本の少年たちの多くは、軍人になることを夢見ていたので、当然である。

次いで多喜二はこう書く。「そして一四、五には一躍『鉾山王』になることを空想した。」これは庁商の時代であり、予科を終わるところであろう。「学校までの道は一里半もあったので、途中その計画を色々空想して歩くことを、自分は毎日のたった一つの楽しみしにしていた。」ここで、学校というのは、もちろん庁商である。それに、パン工場から庁商まで、距離を測ってみると⁽³⁰⁾、ちょうど3 kmなので、一里半はない。若竹町からであれば、一里半はあったであろう。

「センチメンタルな一六、七になると、自分は今度は無条件に『文豪』になることを考えた。⁽³¹⁾」多喜二は他の場所で、鉾山王になりたいわけを書いている。「ぼくは学校へ通う長い道を、鉾山を発見して、母を人力車にのせてやることばかりを考えていた。⁽³²⁾」多喜二は母親にたいして孝行心があついたのであった。こういう気持ちが周囲に知れたのであろう。親孝行なのは、もちろん多喜二だけではなく、姉のチマもそうだった。多喜二は母について書いているが、父への孝行とは書いていない。もちろん父に孝行しないというわけではないだろうが、彼にもイーディプス・コンプレックスがあったのかもしれない。

5 庁商時代

創業時代の小樽商業は、「活気もあり、かなりかたつな校風があった。初代校長の黒沼義介は——学生の自治と自尊を重んじ、形式的な風習を無視して——新年の訓話などもただ『おめでとう』というかんたんな挨拶ですますというふうだった。⁽³³⁾」

(30) 当時の庁商の門、今の生徒通用門までを、自動車で測って見た。

(31) 多喜二「断片を云う」『多喜二全集』第5巻 126 ページ

(32) 多喜二「年譜」同 230 ページ

(33) 手塚, 上, 37 ページ

各1学年100名の庁商では、甲乙2つの学級があり、つまりほぼ50名のクラスである。これを成績によって毎年クラス分けをした。出来る方が甲に入り、成績の下がった方が乙に入った。だからクラス・メートは5年間のうち、毎年交互に入れ替わりとなった。こうしてほとんどの生徒が知り合いになった。もちろん5年間続けて成績がよい人と、続けて成績が悪い者とは、同クラスにはならないわけである。またこの学校は、進級が難しいから上級生が落ちてきて、上級生とも知り合った。

庁商は、遅刻には厳格で、早退、欠席の総計によっては、いかに成績が優秀でも進級ができない。当時緑町の大通り早川商店のある辺までは人家があるが、それからさきは人家もないような雑草地だったから、冬は道もわからず、大変だった。試験の他に平常点があった。これは授業中指名されて答えて、エンマ帳に記録される。それで普段の授業にも真剣にならざるをえない。「当時は学問に力を入れていた。」英語も難しかった。「尋常6年で入った僕は英語で苦労した。」(第2期、越崎宗一談)平均点65点以下は落第で、一科目でも33点以下であれば、平均点が75点以上でなければならない。大体100名の入学で、卒業の時は50名くらいに減ってしまった⁽³⁴⁾。

一年上の嶋田正策は、庁商で、「話すようになったのは、多喜二が一年生の半ごろかな。私が二年。そのころから知り合ったんです。⁽³⁵⁾」嶋田正策は、多喜二が2年の頃、校庭で彼の作文を見た。朝の描写で、コップの水でうがいをするという文章であった。彼は、「その的確な表現におどろいた」。多喜二の小説は、その表現のリズムが特長である。それは、若い頃志賀直哉の小説から学んだからだ、研究者や評論家は書いている。しかし表現の的確さは、初めから素質としてあったのであり、その後の勉強と訓練によって磨かれたと考えた方がよい。

多喜二に作文で影響を与えたであろうと思われる、庁商の渡辺卓教諭は、

(34) 『緑陵五十年史』

(35) 『北方文芸』1968年3月号

本籍が三重県の士族で、大正五年四月、庁商に就任した。あだなは「卓さん」といい、相当に生徒には評判もよく、人気があった。国語、漢文を担当し、従って作文も教えた。作文の教師であるから小林への影響も相当にあったと考えられると、安宅先生もいう。渡辺は、大正七年八月に転任した。だから多喜二とは二年と少し重なっている。

商業科の授業は本科すなわち3年目から教えられたので、予科は普通科が中心であった。この学科目については、後に紹介するが、多喜二は主に予科時代に渡辺先生に教わったことになる。

片岡亮一は、安宅氏の親友でもあったが、小林の近くの家で、歩いて5、6分だった。若松町にあり、母親は小間物店を開き、父は早くなくなった。多喜二と片岡は特に親しく交際した⁽³⁶⁾。

片岡の祖父は明治20年代に渡道し、小樽で廻船問屋などをやっていたが、事業に失敗した。その後は、貸し布団屋であった。片岡は父を3歳の時に失い、5、6歳のころ、それを止めてつつましい仕舞屋(しもたや)暮らしに入った。その家の前はちょうど量徳女子小学校であった。尋常5年11歳の時、片岡の家はそれまでの仕舞屋(しもたや)を引きはらって、他の町、若松町へ移り、祖母と母と3人で小間物店を開業した。彼は小学生でありながら店番をし、それなりに客との応対をしたし、商業学校、高商と進んでも、学校から帰ったあとは、閉店まで店番をし、さらには問屋の仕入れから、掛売りの集金まですべて片岡の仕事であった。したがって店番をしながらでも出来る文芸への道へ、若いエネルギーを発散させることになった。

商業学校の四年のころ、片岡は歌を中央の雑誌に投稿して入賞してから、中央の新聞などにも投稿をはじめ、さらに中央の歌誌にも加わって、短歌への情熱を燃やすことになった⁽³⁷⁾。

庁商時代、蒔田栄一は、帰路を多喜二と同行して高商坂を降り、妙見川で

(36) 安宅先生の小生あて手紙。

(37) 片岡『雪田』

別れる習慣だった⁽³⁸⁾。多喜二は市立小樽図書館の貸出本で外国文学に親しみ、また流行の賀川豊彦『死線を越えて』や島田清次郎『地上』に感動する⁽³⁹⁾少年だった。

6 革命と騒動

大戦中の1917年3月（露歴2月）、協商国側にあって第1次大戦に加わっていたロシアの、ツァーリズム（皇帝制度）が倒れ、ほどなく11月（露歴10月）に、トロツキー⁽⁴⁰⁾とレーニン⁽⁴¹⁾が指導するソヴィエト・プロレタリア革命が起きた。これは世界の労働者・農民に希望を与え、そしてこの事件は、後に多喜二に大きな影響を与えるのであるが、もちろん当時の彼はそれをほとんど意識していないであろう。多喜二が二年生の時であった。

大戦は協商国側の勝利に終わり、日本も世界の五大国の一つとなった。

1918年8月に、日本はシベリアに出兵した。いわゆるシベリア干渉戦争である。シベリアのチェコスロヴァキア軍団を救出するという名目で、初めイギリス・フランスが提案し、やむなくアメリカもそれにのり、そこで日本も加わった戦争である。だが実際は、新生ソヴィエト政権を打倒することを狙ったものだった。しかしこれは失敗した。この干渉戦争は日本が最後まで行っていた。日本の軍隊は公然と出港できなかつた。そして小樽港もそれに利用され、この侵略戦争の出兵の港の一つとなった。

この間、尼港事件も発生した。つまりニコライエフスク（=尼港）で日本

(38) 田中孝先生の小生あて手紙。

(39) 手塚，上

(40) レオン・トロツキー（1879-1940）、本名、レフ・ダヴィドヴィチ・ブロンステイン。レーニンに次いで世界的に有名な、ロシアの革命家。ロシア・プロレタリア革命は、彼の実際的指導で行われた。その後、スターリンの陰謀によって、追放・暗殺され、裏切り者としてデッチあげられた。伝記：アイザック・ドイッチャー『トロツキー伝 三部作』新評論。

(41) (1870-1924)、本名、ウラジミル・イリイチ・ウリヤノフ。伝記として、邦訳『レーニン伝』全3巻、（日本共産党出版部）、があるが、スターリン時代にソ連で書かれたので、スターリンに都合の悪いことは全部偽造されている。

人居留民700人余が、パルチザンによって殺害されるという事件で⁽⁴²⁾あった。1921年には小樽で、尼港事件追悼会が開かれている。

大正七（1918）年には、日本の最大の人民運動である米騒動が、全国的に起きた。米騒動は、シベリア干渉戦争がきっかけであった。全国で米の買占めがなされ、米価があがったので、焼討ちその他が全国で荒れ狂った。これは20世紀の日本最大の下からの運動であった。米騒動は、小樽では例外的に影響が少なかった。小樽ではストライキは起きたが、大きな影響を与えなかった。米騒動以降、警察官は大增員された。大正7年の警視庁の警官は、6年の5割増しとなった。そして米騒動以後、教員の給与が上がった。新聞は統制され始めた。なお大正8年（1919年）に小樽で、はしけ人夫が一斉にストライキをしている。

これらの事件は、大きな意義をもったのだが、多喜二はおそらく若すぎて、当時は余り関心がなかった、あるいはそこまで政治的に成熟していなかったと云った方がよい。あるいは彼は、絵と文学に眼を開き始めるころであったので、彼の視野に入らなかったのだろう。

大正7（1918）年には、北海道大博覧会が開催された。会場は、小樽のほかに札幌と函館だった。北海道の人口は当時約250万人で、同博覧会には約100万人が入場したと言われている。

日本では労働組合が少しずつ結成され始めた。小作争議も頻発した。大正時代から普通選挙運動が高まってきた。1920年ころは一つの高潮期となった。

大戦後の経済で、まず海運業者・造船業者が儲け、船成金という語が流行した。北海道では、豆成金、でんぶん成金が続出した。大正6年ロンドン農産物市場で、青えんどう、はっか、でんぶんが高騰した。豆類は十勝、はっかは北見が産地である。だが、大戦が終わると農産物価格は下落する。大正

(42) 小樽・手宮公園に、この尼港事件の碑文があり、その解釈は、政治史的に正しくない。それを琴坂先生は、手稿「尼港事件」で、正しく批判的に研究した。

9年（1920年）から戦後恐慌が始まった。

一方、大戦後、一般家庭でストーブが使用され始めた。

7 『貧乏物語』

多喜二が入学した年、河上肇の『貧乏物語』が『大阪朝日新聞』に連載されていた。

河上肇（1879-1946）は、京大教授で、初めは人道主義経済学者であった。早くから社会主義への理解を示していたが、人道主義の立場で、ブルジョア経済学の研究から学問を始めた。彼はマルクスを勉強していたが、本格的なマルクス研究は、大正13年に受けた榎田民蔵——マルクス主義経済学者、小樽高商に講演にきたこともある——からの批判がきっかけであった。河上がマルクス主義の立場にしっかり立つのは、大正の終わりか、あるいは昭和の初めである。昭和5年には完全にマルクス主義の立場に立っている。

河上の有名な『貧乏物語』は、大正5年9月から12月まで『大阪朝日新聞』に連載され、それは多喜二が庁商に入った年である。翌6年（1917年）に、河上はこれを弘文堂から単行本として出版した。日本の社会科学の中で最大の影響を与えたと言われるもので、事実これは大いに売れた。読んだ階層は、学校教師、学生、インテリであり、日本で大衆的に大いに影響した。ここで河上は、貧乏を社会構造的なものだと、論じた。当時の日本人は、貧乏はしかたがないもの、自然必然的なものと思っていた。

典型的な例として、田舎の小学校の教師をしていた勝目テルは、当時この本を読んだ印象をこう述べている。1919年に読んだらしい。

「『貧乏物語』というこれまでききなれぬことばは、私のあたまのひだに、あらたなしげきをあたえてくれたようだ。／この世の中には、こういう面もあったのか……と、あらためて私は、じぶんの身のまわりを見まわしてみた。社会ということばのもつ、ばくぜんとした内容におどろきの目をみはってもみた。貧乏や金もちが運命としかおもっていなかった、私のたんじゅんな考え方が、大きく訂正されていくようである。文明が進むにつれて、貧乏人は

多くなり、金もちはますますふとるだけだ。こういう社会は病気をしているのだ、という著者のことばがむねにやきつかれたようである。」……⁽⁴³⁾

しかし河上はこの書を、大正8年に自ら絶版にしてしまった。彼はこの『貧乏物語』でも、マルクスを紹介しているが、まだマルクス主義の立場には立っていない。それどころかあまり科学的ではないのである。なぜなら貧乏の解決を、道德問題に、つまり贅沢を止めることに求めているからである。彼は、奢嗜品産業でなく生活品産業を発展させることを、貧乏問題の解決策とする。これでは不可能であり、非経済学的である。だがこれを読んで当時の若い日本人は感激をしたのである。河上も、当時の日本人も、社会科学的水準が随分低かったことの証明である。河上は後に、これを絶版にするより外はなかったのだ⁽⁴⁴⁾。

『貧乏物語』を愛読した人には、次の人たちがいる。大塚金之助は、愛読し、新聞を切り抜いた。たぶん大内兵衛も読んだ。松田道雄の友人Y氏。また影響を受けた人たちは、水上勉、周恩来、郭沫若、廖承志、木田金次郎（岩内出身の画家）、その夫人、有島武郎、いま出た勝目テル、その第三兄、そして何と、小樽商業学校初代校長黒沼義介である。

多喜二はどうだっただろうか。私は、高商時代に多喜二は『貧乏物語』を読んだのではないかと、推測する。もし多喜二がこれを読まなかったとしても、少なくとも確かなのは、多喜二は『貧乏物語』の存在を知っていた、その内容は大体知っていた、本をパラパラめくってみたことがある、ということである。

多喜二が庁商に入った年、1916年（大正5年）は、吉野論文が出た年である。文学では夏目漱石が活躍していた。例えば、最後の長編『明暗』（未完）を出している。中条百合子がすでに「貧しき人々」を出していた。

(43) 勝目テル『未来にかけた日々』平和ふじん新聞社 1962年 79-80ページ

(44) 1970年代に北海道大学のゼミナールでこれをテキストにした私の経験によると、学生はこれを読んで、「だまされた」と語ったのである。つまり河上が貧乏問題の正しい解決を提示していないことを、現在の学生は容易に見抜くのである。

多喜二が予科2年になった時、大杉栄はクロポトキンの『相互扶助論』を翻訳して出した。1919（大正8）年4月には、雑誌『改造』が創刊された。この雑誌は後に多喜二の愛読誌となるものだった。

8 黒沼校長

黒沼義介は、庁商の初代校長で、多喜二の在学時代にも校長であった。彼は東京高商（今の一橋大学）の卒業で、徳島県立商業学校長から転任して、庁商の校長になった。開校の年、大正2年（1913年）4月8日に着任した。

黒沼は、社会科学や経済学については、河上肇の影響を多分に受けていた。黒沼は、経済学や修身科の授業に、河上の個人雑誌を携えていた⁽⁴⁵⁾。そうすると、それは河上が個人で発行した有名な雑誌『社会問題研究』に他なるまい。河上は大正8年（1919年）にこれを創刊した。だから、この情景は、黒沼が校長になってから数年後のことであろう。そういうわけで、黒沼が影響を受けていたのは、マルクス主義以前の河上である。

黒沼は、修身の時間に、生徒に河上肇の『貧乏物語』を読んで聞かせた。黒沼校長はまた、社会思想に興味のある生徒を集めて、講座のようなものをやったりしたことがある。

これらのことも多喜二に影響したのではないかと、同級生が言っている⁽⁴⁶⁾。以上のことによって多喜二は、社会問題や貧困問題に目を開かされたかもしれないが、すでにのべたように、黒沼を通じての河上の影響はマルクス主義的なものではなかったのである。

黒沼は、商業学校は大学進学の前備校ではなく、実業人を養成する完成教育の場であると考え、社会の要望に応じうる常識の涵養に留意していた。また小樽高商の渡辺龍聖校長と親密な間柄となって、彼の影響を受けていた。

黒沼は庁商で紳士教育をした。紳士教育は、渡辺校長の精神であって、黒

(45) 石本氏の話

(46) 安宅氏の手紙

沼はこれに同感した。紳士教育は、明治以降の商業学校、高等商業学校で採用された精神で、2つの意味があった。先ず、ヨーロッパの影響であって、人間尊重主義から来ていた。次に、江戸時代の士農工商の第四身分である商を一人前にしようとした考えである。黒沼は、「お前たちは紳士なんだから」という意味のことや、「正直は最上の政策なり」と言った。紳士教育は色々な分野で行われたが、例えば、しつけや服装もやかましかった。端麗・しょうしゃで華美な感じを求めたのであったが、勿論現在のそれとはちがっている。粗暴と蛮風を許さなかったのである。

黒沼は、自由主義にたいする深い信念を持っていた。ただし自由主義といっても、この時代の日本のことであるから、額面通りに受け取れるとは言えない。彼は、勿論、真の自由とは、放縦ではないこと、また、とうぜん守る真に正しい事と考えたことは積極的にこれを実行すること、と見なした。彼は、つまらない無駄なことはしなかった。合理主義者だったのであろう。出勤簿を作らなかつたし、学校の部屋には表札を掛けなかつた。元旦などの拝賀式に、「新年おめでとう」と、これだけの挨拶で、あとは紅白の餅をくれただけであった。黒沼はまた、大いに運動をして身体を鍛えよ、頑丈な身体を作れと、言っていた。彼は厳格だったが、人格を尊重した。職員も学生も畏敬の念を抱いていた。学校経営は、小樽の財界や高商の渡辺校長などと相談しながら、自主的に行ったが、その一方、何でも「相談的に事を運ぶ人」であった。何か古武士的な明治型といった風格があったようで、政治性もあり、社交性もあった。また仏教に深く帰依していた。

黒沼は、色はあさ黒く、眼光けいけいとして、人を射る厳しさを持っていたが、言葉はおだやかであった。決して生徒に迎合するところなく、じゅんじゅんと説いてゆく、明治教育家のバックボーンを持っていた。この校長は、知育は勿論であるが、体育を特に奨励し、まだスキーの珍しいその頃、正法

(47) 越崎宗一『郷土史的自叙伝』昭和53年

寺近くの自宅からスキーで学校へ通っていた。まだ一本杖時代であった⁽⁴⁷⁾。スキーが小樽に入ったのは、高商講師苦米地が明治45年2月に、またオーストリアのレルヒ中佐に教わった三瓶中尉が明治45年4月、小樽でスキーを実演したのが最初である。

黒沼は大正9年(1920年)に退任し、秋田市立商業学校に転任し、小樽を去った。彼はほぼ7年間、小樽商業の校長であった。多喜二の学生時代は、黒沼校長の最後の4年間となっている。つまり多喜二が卒業する1年前である。彼が本科2年が終わった時であった。

庁商の校風、厳格な自由主義教育が、黒沼校長によって作られた。多喜二の学校生活も黒沼の教育政策の影響を受けていた⁽⁴⁸⁾。黒沼はつねにこう言っていた。「自分で正しいと思ったことはどんどんやりなさい。但し、間違っていたと思ったら、直ちに改めなさい。⁽⁴⁹⁾」小林の中にある「正義感」も、この黒沼の教えによって育てられたと感ずると、同級生の安宅氏は追想している。これに影響されたかどうかは不明であるが、多喜二は結局この言葉通りに生きた。

9 授業科目など

「北海道庁立小樽商業学校生徒必携」(安宅先生所有。以下、「必携」と略)では、予科一年の学科目(毎週教授時数)課程が、次のようである。

- | | |
|--------|----------------------------|
| 修身 | (二) 道德の要領 |
| 国語 | (六) 講読, 作文, 習字 |
| 英語 | (七) 発音, 綴字, 訳読, 会話, 書取, 習字 |
| 地理, 歴史 | (三) 内国地理歴史 |

(48) この項の参考文献は、「緑陵五十年史」小樽緑陵高等学校, 昭和三九年。「尊商六十年の歩み」北海道小樽商業高等学校, 昭和四十九年。両書とも執筆は、田中孝氏。

(49) 安宅。

- 理科 (四) 植物, 鉱物
 数学 (五) 筆算, 球算, 暗算
 図画 (一) 自在画
 体操 (三) 体操, 教練

第二学年は, 変化した所だけを記すと,

- 理科 (三) 動物, 生理
 図画 (二) 自在画, 用器画

となる。ともに合計 (三〇) である。

本科では第一学年は,

- 修身 (一) 道德の要領
 国語 (五) 講読, 作文, 習字
 英語 (八) 訳読, 会話, 書取, 習字, 作文, 文法
 地理, 歴史 (三) 外国地理, 歴史
 数学 (三) 代数
 簿記 (三) 商業簿記

商業要項, 商業実践

- (三) 内外国商業取引法

- 体操 (三) 体操, 教練

合計 (三二) とある。

第二学年は,

- 修身 同
 国語 (三) 講読, 作文 (習字が抜ける)
 英語
 経済 (二) 経済原論
 法規 (二) 法学通論
 地理, 歴史 同

理科	同
数学	(三) 代数，商業算術
簿記	(二) 商業簿記，銀行簿記
商業要項，商業実践	同
体操	同
合計	(三二) となる。
第三学年は，第二学年にくらべて，こうなる。	
修身	同
国語	同
英語	同
経済	(三) 商業経済，統計
法規	(三) 商業法規
数学	(三) 商業算術，幾何
簿記	(三) 銀行簿記，英文簿記
商品	(二) 内外国重要商品
商業要項，商業実践	
	(三) 内外国商業取引実践
体操	同
合計	(三二)

なお，剣道が正課で，寒稽古は朝7時だった（越崎）。

「必携」には初めの方に，「朕惟フニ我カ皇祖皇宗……」の勅語が一ページにわたり，また詔書が一ページにわたり，ある。この教育勅語は，もちろんこの時代だから，生徒は暗記しなければならない。ただしこの生徒は小学校時代にすで暗記していたであろう。

ついで「綱領」がくる，

「一 四恩を感謝すへし

二 至誠勤勉を旨とし各自の本文を盡くすへし

三 運動を励み身体を鍛錬すへし」

ついで「武道訓」がくる、

- 「一 忠君愛国は道德の要義なり常に心身を鍛錬し義勇公に志すへし
- 一 節義廉恥は士人の生命なり忠信を旨とし怯懦翻覆の行為あるへからず
- 一 礼讓慈愛は武道の華精なり温良恭謙いやしくも長を凌ぎ幼を侮るへからず
- 一 質実剛健は男子の本領なり互に相切磋し軽佻浮薄に流るへからず
- 一 規律節制は進徳の要道なり……」

(以上原文はカタカナ、また、新漢字に変えた部分あり。)

「必携」のなかの「生徒心得」では、敬礼の仕方、制服、制帽、袴など、授業を受ける時の態度、その他諸生活が細かく規定されている。

級長の号令で授業が始められた。また「第一七条」では、「総て不健全なる思想を含める読物は之を避くへし」とある。

「作法要項」では礼儀作法から始まり、姿勢、歩き方、立居振舞い、敬礼(普通礼、最敬礼)、行幸啓拝観の場合の敬礼まで事細かにある。

十ページから二二ページにわたり、居常の心得、姿勢・進退、敬礼、服装、洋服の礼装、招待・応招、食事および饗応の心得、言語応対、訪問、祝賀・告送別・慰問・弔問の心得と注意、接遇、紹介、贈答、集会、通信および交通、祝祭日、さらに家例・祭忌の心得まで、詳細に指示してある。続いて、校友会の会則を示している(二三、二四ページ)その上、最後には五ページにわたって「金銭出納簿」まで加わっている。

「必携」は、本科一年の時に貰ったようだと、安宅先生は言う。黒沼校長の在任時代である。「作法要項」は、社会人として、一生を通しての、作法の心得であり、何を原典としたかは分からない。生徒もその内容については学校からは何も聞いていない。安宅先生は当時これを読んではいなかった。安宅の例からすると、こんな詳しいものを殆んどの生徒は読んではいないであろうといえる。しかしこの担当教師は、閻魔帳で脅かして生徒にこれら倫理的

部分を学習させたから、必携の「生徒心得」などより以外の部分は、多くの生徒は学んだのではないか。黒沼は社会人の教養を目的として指導したのであろう。

「必携」によると、学年暦はこうである（二四ページ）。

第一学期

四月。入学式（八日） 始業式（八日） 八時始業（八日） 体格検査

五月。新入学生制服着用（一日） 修学旅行，海軍記念日（二七日）

六月。夏服着用（一日） 庭球大会 遠足

七月。開校記念日（九日） 講演会 第一学期終業式

第二学期

九月。第二学期始業式（一日） 角力大会

十月。冬服着用（一日） 遠足 運動会野球大会 天長節祝日（三一日）

十一月。九時始業（一日） 講演会 大礼記念武道大会（十一日）

十二月。第二学期終業式

第三学期

一月。新年拝賀式（一日） 第三学期始業式（八日） 蹴球大会 武道寒稽古

二月。遠足 紀元節拝賀式（十一日） スキー大会

三月。陸軍記念日（十日） 入学試験 卒業証書授与式 第三学期終業式

10 文学の出発

多喜二は庁商予科のうちから、作文にすぐれていた。漢文の渡辺卓という教師は、作文に熱心であった。多喜二はいつも彼の推薦作文の中に入っていた。本科1年の時、作文の時間に「健康の必要」という課題に、同級の蒔田栄一と一，二を争う文章を書いて、2人でどちらがさきに本を出すかを競うことになった。

多喜二の文学少年としての友達の一人は、片岡亮一であった。片岡は量徳

小学校を卒業し、庁商に入った。多喜二と同じ年に入った同級生であった。当時若竹町に住んだ。庁商を出てから小樽の百十三銀行に1年間就職することになる。入学後間もなく片岡は、上級生の小野寺の引き合わせで、多喜二との交友が親密になった。小野寺は、潮見台小学校の卒業であって、多喜二の2年先輩であった。多喜二、小野寺、片岡は、その後、3人とも入学年度は皆違うが、高商に進学することになる。

片岡亮一は書く。「大正5年春、庁立小樽商業学校に入学して間もなく、上級生の小野寺（おのでら）君の引合わせで、多喜二との交友が親密となった。片岡は量徳小学校、多喜二は潮見台小学校の6年を卒業して、共に庁商に入学。おのでら君はやはり潮見台小学校出であったから、いわばおのでら君は多喜二の先輩であったわけだ。おのでら君は後に小樽高商でも2人の先輩となったが、高商卒業前に登別で小樽の芸妓と心中して世を去った。⁽⁵⁰⁾」小野寺は庁商で秀才で、英語が非常にできた。彼は剣道と文学をやっていて、『文章世界』を講読しており、その影響で多喜二や片岡はその読者になった。小野寺は、ある小樽の芸者と恋愛をし、高商を卒業する前に、登別で彼女と心中し、亡くなった。火山の温泉の熱いつぼに飛び込んだのだった。

11 入院

多喜二は庁商時代のある夏に、器械体操の時間で、落ちて足を骨折し、入院したことがある。鉄棒で、であった。チマさんは「庁商のはじめごろ」と言う。前述のように風間は、商業三年のとき、と聞いている。

この入院した病院は、小樽の鎌倉病院といい、今の藤山整形外科医院の場所である。

嶋田は想像する。「彼は背が低くて、五尺一寸ぐらいだ。それで、大きくな

(50) 片岡（『緑丘』42）

(50 a) 森田たまの友人。2人で森田章平に師事する。

(51) 『北方文芸』1968年3月

るつもりでやったんじゃないかと思うのだが、鉄棒をやって、何かのはずみで足を折った。その時、上野山清貴の夫人・素木しず子^(50a)。あの人のものを読んでいる。彼女はカリエスで右足を切断している。足を痛めた時、多喜二は想像を働かせたんじゃないかな」と⁽⁵¹⁾。上野山は画家である。多喜二はこの時の経験を、後に、いくつかの短編小説めいた作品で書くのである。

12 石本少年と

同級生・石本武明（たけあき）少年は、明治35年（1902年）8月15日、鳥取生まれである。したがって多喜二より1歳多い。6歳のころ、両親と長男とともに、「新天地を目指して」小樽に移ってきたのだった⁽⁵²⁾。ちょうど多喜二と同じようなケースである。小樽の小学校を卒業して、庁商に入った。

彼は、多喜二と気が合ったと見えて、学校の帰り時々、彼と「お焼き」（東京方言で言えば、たいこ焼き）を食べに行った。地獄坂を下り、今の銀座通りのガード下^(52a)、当時は踏切下に、軒の低い小さな「お焼き屋」があり、当時としては唯一の休み場所であった。粗末な木製のテーブルをはさんで、二人でお焼きを食べながら、話す。

多喜二の話は、文学の話が多かった。それに、お互いに若かったので、関心の対象は、庁立女学校（＝庁立高女）の生徒であった。朝、学校に来るとき、誰に会ったとか、誰はいつ見てもシャンだとか、今朝は誰に会わなくて残念であったとか、であった。石本氏にとって、今も楽しい思い出である。

多喜二は、体格ががっしりしていた。スキーは余りやらなかった。その代わり、水泳は上手で、蘭島に海水浴に行ったりした。また小樽港の埠頭（昔は磯であった）から、当時の防波堤まで、泳いで往復するほどであった⁽⁵³⁾。

庁商はスキーや剣道で全国的に有名な学校だった⁽⁵⁴⁾。多喜二は学校でのそ

(52) 岩田さん手紙。

(52 a) ガード下とは、よく分からない。石本氏の表現。

(53) 石本，文。

(54) 蒔田（『緑丘』42）

ういうスポーツはやらなかった。黒沼校長はスポーツを奨励していたので、多喜二は校長に、その点ではよく思われなかったかも知れない。

石本少年は当時、弁天町（その後の仲の町、今は松ヶ枝町）にいた。多喜二はそこへよく遊びに来た。

学校でのユーモラスな思い出を、石本氏は紹介している。

きわめて酒好きの英語の先生がいた。たしか千葉先生という。当時生徒仲間では、先生をあだ名で呼んでいたが、不思議なことにこの先生にはあだ名がなかった。

朝の1時間目に、教室に酒のにおいをプンプンさせて入ってくるなり、「小林、小使室に行って水を汲んでこい」。

多喜二は、背が低かったから、一番前の席に座っていた。

多喜二「ハイッ」。小使室から、やかんに水を汲んで提げてくる。

「ああ、よし」。いきなりやかんに口をつけ、ゴクンゴクンとうまそうに飲み、「フーツ」といって、教壇の角にどっかと腰をかけ、イビキをかいて気持ちよさそうに寝込んでしまう。

あと十分ぐらいで鐘の鳴るころ、「ああ大変だ、皆、教科書を開け」。

ペラペラと4、5頁読んで、「今日はこれで終わり」、

教室を出ていってしまう。アメリカ帰りで発音の綺麗な先生であった。

皆は、眠っている間、漫談をしたり、ガヤガヤ騒いで大喜びであった⁽⁵⁵⁾。

石本氏によれば、多喜二は気の優しい、人なつこい、明るい人柄であった。普段は、きわめて陽気で、朗らかであった。話は上手で、人を笑わせてばかりいた。しかし自分と家の苦しみを全然表面に出さなかったし、つとめて陽気にふるまった⁽⁵⁶⁾とも言える。というのは、石本氏あての1921年7月20日消印の手紙で、こうあるからである。

「……俺の生来の陽気なのに誰も影を思ひ出したことがないのだ。嬉しいや

(55) これ以外の思い出は、『四葉随想』第三輯，昭和58年10月

(56) 石本 文，および同氏インタビュー。

ら、悲しいやら。……常に笑ひ笑談を云ふものは、必ずしも心の平和な人とは限らない」。

また同年8月15日消印の、同氏あての手紙でも、その裏面に、前出の文が再び書かれ、その本文ではこうある。

「(君の眼に映じた俺は浮はくに映るだろう。俺は、うはべは、成るだけ陽気にしたい性格だから仕方がないよ)が、君と会って笑談を云って笑う間にも何かしら考えていゐることは事実なのだ。……が、到底君に何等かを打ち明くべくあまりに俺は、poorなのだ。……⁽⁵⁷⁾」

この二つの手紙は、多喜二が高商へ入った年、彼の一年生の夏のことである。もしかしたらポーズかもしれないが、彼の一面は語っているであろう。多喜二はとても楽しい愉快な人で、ひょうきんでもあった。気の合った友達には特にそうであったろう。それを、簡単で単純な人間だと思われてはいやだと思ったのである。ちょっと気のきいた人の少年時代にはよくあることである。もちろん伯父の家に厄介になっている状況だから、簡単ではない。しかし実際は多喜二という人は、いつも笑顔で、人を笑わせ、愉快な人だったのである。

13 絵

多喜二は庁商予科2年生(1917年、大正6年)の頃から、校友たちとともに水彩画を画き始めていた。翌年(1918年、大正7年)、本科1年生のとき、秋に、6、7人のグループができ、校内の廊下で初の展覧会を開いた。彼は、『文章世界』のカットの懸賞募集にも、入選・選外佳作などになった。このグループは、小羊画会という名をつけた。翌年には白洋画会と改名している。

当時、博文館から『少年世界』などが出ていた。カット絵を募集していた。

(57)「小林多喜二未発表書簡」(『民主文学』新日本出版社、1984年2月号)ちなみに、ここに収められている6通の石本氏あての手紙は、最新の『小林多喜二全集』に収録された。筆者は同氏にこの手紙を拝見させて頂いた。

カット絵は「コマ絵」といった。この頃は皆、美濃紙に描いていた。正しくはドウサ半紙という。嶋田正策の絵は、『中学世界』に入選した。「鋤をかついだ農夫」であった。賞金として一円貰った。多喜二の絵が『文章世界』に入選したことは、嶋田は知らなかった。

嶋田は述べる。「多喜二と親しくするようになったのは、[嶋田が]南小樽駅近くに住んでいたことも条件」だ。そして「博文館発行の雑誌『中学世界』にコマ絵を投稿し、大正8年の終わりには入選し、また学校で同じ年に絵の展覧会をやったりしたことも小林との仲を深くした。⁽⁵⁸⁾」

高桑市郎⁽⁵⁹⁾は回想する。当時雑誌『文章世界』でコマ絵を募集していた。この絵は、写実よりも感覚を図案化したものに近いペン画だった。多喜二はこれに投稿していたということだった。高桑が多喜二の上級生の灰野文一郎(後に日展会員になる)等と洋画研究所を開設したとき、研究生として来たことがある。彼の庁商時代であった。多喜二は、無口で素直で、絵の基礎的素養なしに、大胆ないわゆる自由画的な水彩画を、黙々と描いていた。用紙は、当時水彩画用紙として一般的の、木炭紙の四分の一大で、絵の具も、泥絵の具に近い安物と、太い筆を使っていた。従って、その絵はセピヤと濁った濃緑系が主で、陰鬱な絵であったと記憶している。これが彼の個性に適していたのかもしれない、と⁽⁶⁰⁾。

絵の友人でもある嶋田正策は回想している。「小林は……初めは絵でも有名になろうと志してたらしい。^(60a)」「多喜二とは絵の展覧会も堺町の小樽倶楽部へ見に行った。……平沢貞通のパステル画が陳列してあった。⁽⁶¹⁾」これはいつのことか明記されていないが、庁商時代のものである。またここに出て来る平沢画伯は、当時でも小樽でよく知られた数人の画家の一人であった。多喜

(58) 「本郷だより」18号

(59) 当時小樽中学生、高商に入り、多喜二の1年後、大正14年に卒業した。

(60) 「多喜二氏の絵」(『緑丘』42, 16ページ)

(60 a) 嶋田「多喜二の思ひ出」3, (『トラクター』)

(61) 『緑丘』小樽商大同窓会誌 全国版 通巻No.四十二号 三十六年度 六号
 墓目英三編集 緑丘大阪支部

二も知っていたであろう。

平沢貞通（さだみち）画伯は、第二次大戦直後、帝銀事件の犯人として死刑判決を受けた人である。1948年に逮捕され、1987年に死亡した。実に獄中39年の間、無実を叫び続けた。

昭和23年1月26日、東京・新宿の帝国銀行椎名町支店で、閉店直後、一人の男が現れ、赤痢の予防薬と称し、全銀行員に薬を飲ませて、一六名の内一二名が殺された。大量殺人・強盗事件であった。

その場に置かれた名刺の人物と偶然に名刺を交換したことのある平沢画伯が、小樽で逮捕された。彼は自白に追い込まれ、これを証拠に死刑となった。旧刑法の時代であったので、自白が証拠とされたのだった。自白をさせるにも拷問が加えられた。

平沢がこの銀行員たちを毒殺したことはあり得ない。そのやり方は、素人ではとてもできないのである。専門的に毒薬を扱ったことのある、特殊の経験を持つ人物でないと、むずかしいものである。実際は、満州の七三一部隊⁽⁶²⁾に関連のある医薬専門技術者であろう。

警察は、一時、真犯人に目星をつけた。だがその頃、アメリカ占領軍は、七三一部隊の医学的実験記録を入手したいため、この部隊を守った。そして警察は、捜査方針を転換した。だが警察としては真犯人を挙げねばならず、それを平沢画伯に見い出した。平沢は、こうしてフレーム・アップ、つまり犯人としてデッチあげられたのであった。帝銀事件では、平沢にたいして権力犯罪・国家犯罪が行われた⁽⁶³⁾。

(62) 森村誠一『悪魔の飽食』角川書店、参照。石井中将に率いられた、細菌・毒物の生体実験の軍事研究部隊。

(63) 帝銀事件文献。森川哲郎『獄中一万日』図書出版社；同『新版・帝銀事件』三一書房；同『獄中三十二年』徳間書店；遠藤誠『帝銀事件裁判の謎』青山館；松本清張「帝銀事件の謎」（『日本の黒い霧』文芸春秋）；平沢貞通『遺書 帝銀事件』徳間書店；平沢武彦編『平沢貞通 祈りの画集』KK ダイナミックセラーズ；ウィリアム・トリプレット『帝銀事件の真実』講談社

小樽は美術の盛んな町であった。大正から昭和初期にかけて小樽の美術運動の軸となったのは、三浦鮮治であった。大正5年、弟・兼平英示らと、小樽洋画研究所を開設した。このメンバーを中心として大正12年か13年に太地社が結成された。多喜二はそこへ通ったこともある。それはまだ商業 [= 庁商] 二・三年頃だと、嶋田は思う^(63a)。

1919年(大正8年)、多喜二が本科2年の頃に、洋画展覧会を稲穂町の中央倶楽部で開いた。この時に多喜二が加わったかどうか不明である。だが筆者は、多喜二がこれに参加したと思う。少なくとも見に行った。

商業学校の先輩水戸範雄を中心として、中央倶楽部で、展覧会が開かれた。そこは今の都通りにあった電気館の二階であった。大正9年(1920年)9月である、とされる。つまり、次の年のこととなる。そのとき多喜二も4、5点出品し、その一つに、かれが蘭島で描いた『赤い鉄橋』があった。「真昼の外光」もあった。ビール瓶を主とした静物、そして他1、2点あった。入場者はポツポツで、もちろん作品は売れなかった。一説によると、多喜二は6点の水彩画を出品したという。『小樽新聞』には記事と批評が出たりして、出品者の意気があがった。

嶋田正策は言う、彼が庁商最高学年のとき、展覧会があつて、出品した。白樺の林の絵であった。灰野文一郎も出した。高砂町の酒造屋水戸家の次男範雄もいた。水戸は、庁商で嶋田より1年先輩で画家を志望していた。展覧会は電気館[今の銀座通りにあった]で行われ、多喜二も出品している、と。この嶋田のいうものは、一体いつであろうか。

このグループは白洋画会と名づけられたものである。だが嶋田は白羊画会と記している。手塚伝記では、この展覧会が1920年の9月18日、19日の2日間だったとしている⁽⁶⁴⁾。しかし嶋田は、1922年が本当であると書いているし⁽⁶⁵⁾、

(63 a) 嶋田「多喜二の思ひ出」3、(『トラクター』)

(64) 手塚、上、44ページ

(65) 嶋田正策「私の『自画像』を書いた頃」(『民主文学』)

そう言っている。そうすると、多喜二の高商時代ということになる。前述の中央倶楽部での展覧会は、嶋田の言うそれなのであろうか。後に述べるように、多喜二は庁商本科3年の時に、伯父に絵をかくのを禁止されるのである。だから嶋田は言う。「多喜二の伯父さんの禁を破って、未だ絵を描いていたのが真相でないかと思う。」

多分、1919年に展覧会があった。ここに嶋田も多喜二も出品しているのだろう。次に、1920年にも展覧会があった。手塚が記し、嶋田が否定している年である。だがここでは手塚が正しいのではないか。嶋田がこの時小樽におらず、室蘭にいたので、知らなかったのではないか。なお嶋田が云うように1922年にも展覧会があったのだろう。

当時小樽には、中学校に大月源二らの白潮会、中村善作らの洋画研究所があって、洋画が主であった。多喜二は中村善作のことはよく知っている。小樽で普通の意味で代表的な画家は、中村善作である。中村は1901年に小樽区花園町に生まれた。多喜二よりちょうど2歳上である。1908年に花園小学校に入学し、1915年に堺小学校高等科を卒業し、小樽実業補修学校に学んだ。翌年卒業し、西谷海運に入社した。昼は働き、夜は小樽洋画研究所に学んだ。1918年に神戸に転勤し、1922年帰郷し、絵の猛勉強をした。1923年または24年に、前述のように太地社に加わった。太地社の命名は、大月源二である。中村は少なくとも1928年に多喜二と親しく交遊した⁽⁶⁶⁾。1929年に上京し、1983年に亡くなった。

大月源二とは、多喜二は後に仕事を一緒にすることになる。大月源二は⁽⁶⁷⁾、多喜二と学年が同じであって、多喜二が庁商へ入学した時に、彼は小樽中学へ入学した。二人は、登校の時によくすれちがった。大月源二によると、汐見台の樽中の近くの坂の上から、顔をまっすぐにあげて、白いカバンを掛け

(66) 鈴木正實『中村善作』北海道新聞社 141ページ

(67) 大月源二 (1904-1971)。函館生まれ、1910年小樽区立稲穂小に入る。1916年庁立小樽中学入学。1920年第3回小樽洋画研究所展に出品。1922年、東京美術学校入学。1927年、美校卒業、日本プロレタリア芸術家同盟に参加。

た撫で肩をゆっくり振りながら降りて来る小柄の色白の少年，それが多喜二だった，と言う⁽⁶⁸⁾。まもなく二人は水彩画を描くことで知り合うのだった。

伊藤整は書く。「小林多喜二の小説の挿絵をよく描いていた大月源二氏は，その [=小樽] 中学校で，私の一年上級生だった。非常な秀才であったように記憶する。美術学校へ一番か二番かで入ったと聞いたが，途中でよしてナップへ走ったらしい。⁽⁶⁹⁾」

前出の風間六三は，小樽中学時代に，稲穂小の校長の息子で稲垣小五郎が小樽中学にいて，知り合った。稲垣はあとで学校をやめ，上京し，川端画塾に入る。のち目黒 生 (=うまる) のペンネームで，柳瀬正夢と同じくプロレタリア美術をやった。

風間は云う。大月源二 (=多喜二と同じ歳) が「小樽中学の先輩として，白潮会に参加した。それは小羊会と張り合った。公会堂で共催の展覧会をやった。中央倶楽部で小羊画会もやった。多喜二はこれら展覧会や集まりに必ず出席し，何かと発言した。⁽⁷⁰⁾」

展覧会は，高桑市郎 (小樽中学在学) がやっているグループと正策らのグループと両方がそれぞれやった。多喜二は両方に加わっていた⁽⁷¹⁾。

写真雑誌『アマチュア』大正10年(1921年)1月に，白洋畫研究会の同人として，西村羊三，高桑市郎，斎藤次郎，木下鳳一郎，小林多喜二，灰野文一郎，の名がある⁽⁷²⁾。

嶋田正策は，大正九年三月に庁商を出て，半年小樽におり，10月に室蘭に転勤した。嶋田正策は庁商で剣道の選手になる。剣道の先生は横溝勤也で，三菱の剣道師範もしていた。だから，嶋田が大正九年に庁商を出てから，三菱鉱業北海道炭売所に就職するのは，この先生の関係である。この支店長は

(68) 大月源二「多喜二と私」(『北方文芸』1968年3月)84ページ

(69) 『伊藤整全集』二三巻，三二ページ

(70) 笠井清「小林多喜二と風間六三」45ページ

(71) 嶋田氏と小生とのインタビューおよび1989年5月および6月の小生あて同氏手紙。

(72) 田中 孝 手紙より

田中丸裕厚といい、庁商からは主に剣道の選手が多かったが、六人入社した。

多喜二が小樽高商の一年生の修学旅行で室蘭に来たとき、正策は彼を会社の寮に泊めた。会社の島崎と皆川が一緒だった。

嶋田は室蘭には一年半いて、また小樽に転勤した。彼は言う。それから小樽でもう一度、絵の展覧会、つまり洋画展覧会をやっている。嶋田は、「絵鞆」(えとも)を出品した。室蘭で描いた漁村の絵である。これが前述の1922年の展覧会のようである。また水戸が中心になって同じ場所で殆ど同じメンバーであった。多喜二は出さなかった。あるいは「サキリのある風景」外を出品している。

水戸範雄は、その後上京し、片田(または多)徳郎(日展審査員)に師事した。こうすると、多喜二の庁商時代と高商時代の両方で、展覧会があったものと思われる。どうやら少なくとも合計3回は開いたようである。

なお多喜二が庁商5年の時、大正9年(1920年)に、庁商の二階廊下で生徒画会の展覧会が行われた。その時の彼のスナップ写真が残っている。絵に見入っている姿である。9月9日の写真である。ここに多喜二は祝津で写生した水彩画「海近き崖」を出品した。

同じ年、大正9年秋に、つまり同時期に、夏休み後、校外で白羊画会を開いたが、『北門新報』には、多喜二の「『海近き崖』は強みと深みとをもって整っている」と批評された。

14 絵の禁止

だが大正9年、庁商3年生の9月下旬に、多喜二は伯父から絵をかくことを厳しく止められた、とされる。この事情は、作品「石と砂」に書かれている。この作には「最近起きた、(勿論私を中心をして)実感です」という付記があるので、利用してもよいであろう。

彼は伯父の居候であった。そして夜しばしば絵の仲間の家に出掛けていた。ある朝、食事の時、伯父に叱られた。

「貴様、この頃いつでも外へ出る」

「俺はずうっと前から貴様が外へ出て歩くのをおぼえていたんだ。第一 貴様の友達が悪い奴ばかりだ……」

「それにお前はこの頃 絵とか、俳句にこっているなあ」

「絵なんかやめれ」

「絵なんて、いらぬものだけども、あまりか勉強していると頭を悪くするから、たまに、図画をかかせるんだ……⁽⁷³⁾」

「少し黙っていれば、勉強もそっちのけにして、増長しやがる」

ここで伯父が俳句といっているのは誤りで⁽⁷⁴⁾ あって、多喜二は短歌を作っていた。もっとも伯父が短歌と俳句の区別をしないで言ったのか、またはこの作品が小説なので、多喜二がわざと短歌と書かなかったのか、である。

それはとにかく、居候の彼は絵を止めざるを得なかった、とされる。3年間も描いてきたあの華やかな絵を止めるのは辛かった。

この事件は、より上級の学校へゆくことがかなり分かっていた時であったとすれば、伯父が入学試験を心配していたからだ、とも考えられる。伯父は絵画の意義が分からなかった。それに当時の人はその通りである。勿論、日本社会は一般に絵画の意義は分からないし、その職業で生活できる人は今でもほとんどいない。伯父の言うことも非難するに値しないし、当時の日本人なら誰でも言っていただろう。

姉チマは、「絵は好きだったんでしょけど、伯父がやめさせたんでしょ。きっと何か言われて。」と語る。多喜二はこの件を、姉か母に語ったのであろう。それに対して、嶋田は言う。「それよりも、どっちかといえば自分からやめたんじゃないかな。というのは、文学をやるのに、絵と両方やっているは、と考へたんじゃないかな。⁽⁷⁵⁾」

実際は、上記の多喜二が描いた話は、多喜二に絵を禁止させることになっ

(73) 「石と砂」『多喜二全集』

(74) これに気が付いた人は安宅先生である。

(75) 『北方文芸』1968年3月号

たのではなく、日常的な会話だったと思われる。絵をやめなければ、学費を絶つとか、そういう類の脅かしではなかったであろう。

嶋田は、多喜二の絵について述べている。「多喜二は独特のものを持っていた。……もしこの道に進んだら、一家をなしたのではないかと思う」と書く。しかし大変矛盾するのだが、同じ嶋田は他の場所で、こう語ってもいる。多喜二の絵の腕前は、「うまい、ってところまではいかなかった⁽⁷⁶⁾」。

多喜二は、絵を止める代わりに、小説の創作に向かったとされる。これなら、ものを書いているので、伯父には勉強をしていると思われた。だが、嶋田の言うように、伯父さんの目を盗んで絵をかいていたのが、本当ではないだろうか。それに多喜二は少なくとも高商1年の終わりには(後述)、伯父の家を出て実家に帰って生活するので、それからは伯父の禁止は無意味であったろう。むしろ高商に入ってから再びしばし絵筆を握ったし、それはかなり自由にできたであろう。事実、前述のように高商時代に、絵の会のメンバーとなっている。多喜二が絵を禁止されたのは、いや禁止されたとしても、庁商時代で言えば、最後の半年にすぎない。

しかしこの出来事によって、そしてそれがきっかけとは言えないが、多喜二は絵に進むよりも、もっと文章の道に進むことになった。それに彼には、文章、文学にも才能があった。

後年多喜二は、どうして小説を選んだのかと聞かれて、「小説は、金がかからないから」と答えたことがある。多喜二は絵に熱中して、一時は絵の道に行こうと考えたかもしれない。小樽では多くの友人が絵を選んで東京へでていった。彼が画家になることを望んだとしても不思議ではない。しかし、多喜二が本格的に画家になろうと思ったら、難しかっただろう。少なくとも東京美術学校くらいに進学しなければ、うだつはあがらないだろう。豊かではなく、居候で商業学校にあげてもらっている彼には、それは望めないことである。

(76)『北方文芸』1968年3月号

実際、伯父は云った。「絵にこれば馬鹿になるんだぜ。Kの息子を見れ。やれ絵かきになるといって東京に飛び出し、いゝ加減の頃 帰って来て、一万円くれって、親父から取って洋行する。三十も四十にもなって、まだ嬢も取れないんだ。貴様もそんな馬鹿になりたいか。勉強で飯を食うなら勉強せよ⁽⁷⁷⁾」伯父が絵の学校へやってくれることはない。

小説を書くだけならば、ペンと原稿用紙を買うだけでやってゆけるのだ。読む小説本は借りればよい。実際、学生時代の多喜二は、あまり本は買わず、図書館から、あるいは友人から借りていたことが多いのである。原稿用紙も余り買わなかった。

実は多喜二が絵を止めたのは、嶋田によれば、こうだった。「しかし、お互いに之と云って優れた作品は出来なかった。」と、彼は2人の絵の活動のことを述べてから、言う。

その内に、彼〔多喜二〕は『文章世界』に「龍介と乞食」、『新興文学』に「健」が出た頃、「俺はもう絵は止めた。どうしても、力が分散されるから」と言い出した。……それ以来ひたすら作家としての道を進んだのであった⁽⁷⁸⁾。

だが「龍介と乞食」は1922年3月号、「健」は1923年1月号に載ったものであり、ずいぶん時間的なへだたりがある。ざっと言って、多喜二が絵を止めたのは高商2年生のころと言えるであろう。

こうして、多くの、あるいはすべての多喜二研究家・伝記作者は、多喜二の「石と砂」をそのまま信じ、伯父に叱られて多喜二が絵筆を折ってしまったと考えている。フィクションと事実を混同しているのである。

(77) 「石と砂」『多喜二全集』。ルビ、強調は、省いた。

(78) 嶋田「多喜二の思ひ出」3, (『トラクター』)

(本稿は、高商研究会の活動の一結果である。)